

ブローグ

「コランの町の居酒屋、『海豚亭』にその男が現れたのは、秋も終わりに近づいた、ある日だった。

燃えるような朱の髪。浅黒い顔につつすらと残ったそばかすの跡と、顔の下半分を覆う髭のせいで、一見ただけでは年齢不詳。言うなれば 三十歳から四十歳半ばの間にあることは、違いあるまい。

刈り入れをとうに終え、冬將軍の到来を待つだけの田畑を横切り、古びた看板をくぐる。

「おや、いらっしやい」

狭い室内は、地の果ての居酒屋とは思えぬ程の繁盛振りを見せており、思わず面喰らったように立ち尽くす男に、最近ではかなり愛想が良くなってきたと評判の女将が、声をかけた。

「悪いね、今日は満席なんだよ。相席で良ければ」

「女将さん、ここが空いているわ」

女将の声を遮って、カウンターに座していた一人の女が、告げる。

彼女にからんでいた酔っ払いをぐいと押し分け、一人分の席を確保する、女。

「そりゃあないぜ、リヴ。あんたの隣は、俺の指定席って決まってるだろっ？」

哀願する酔っ払いを無視して、リヴと呼ばれた黒髪の女は、男に向かって手招きする。

室内だというのに、濃い色のマントのフードさえ下ろしたままの女に少しうさんくさげに、男は腰を下ろした。

「それで、あなたはどんな話を聞かせてくれるのかしら？」

白いワインを男に勧めつつ、女は口を開く。

「今日は、魔道師さんも詩人さんもないから少し退屈していたの。あなたは」

ぐるりと室内を見回した女の目が、新参者である赤髪の男の前で止まり、その唇がくつと吊り上がる。

「ここに居る連中よりは、面白い話を聞かせてくれると思ったのだけどっ。」

「『暁の剣士』、か」

重い声が、男の口から漏れた。

「俺も、やつらを探して、やつらのことを聞くんもりでここまで来たんだ」

「こんな、地の果てまで。」

そんな男の心中を察したように、女はくすりと笑う。

「あら残念ね」

そう、こんな地の果てにわざわざ来る人は、皆同じ。

「聞きたければ、先ず話せ。それが『海豚亭』のしきたりなのよ」

「おや、そんなしきたり誰が決めたんだい？」

「からかうように茶々をいれる女将に、」

「知らなかったの？ 女将さん」

ことさら驚いたように、目を見開いて見せる、女。

「リヴ。そんな奴ほっておいて、俺の話を聞けよ」

「ここぞとばかりに絡んでくる酔っ払いを体よくあしらひ、女は再び男に向き直る。」

気がつけば、いつの間にかやじ馬が彼らを取り囲んでおり どうやら、何かを話さない限り逃がしてはもらえないようだ。

「女将、エールを一杯」

泡立つエールで喉を湿し、男は諦めたように口を開いた。

「俺が、あいつと出会ってから、十 何年になるかな」

「今で言う『暁の剣士』シェイ。その頃のあいつは『死神』、そして俺は『裏切者』と呼ばれていた」

「一緒に稼いだのは、一年足らず。奴と再び肩を並べたのは、それから四年程経った後だ」

いつしか、しんと静まり返る居酒屋に、男の声は陰々と響いて行った。

1 .

「泣かないで、マーシィ」

暗がりの中。冷たい石の床にしゃがみこんで、じっと地面を見つめる幼女に、女は優しく語りかける。

「大丈夫。何も怖がらなくていいの。私が、ついてるわ」

そう言う女の方が、心細げに震えていることを、幼女は知っていた。

武器ひとつ持たず 持っていたところで、彼女に使いこなせはしなかつただろうが 谷からも、めったに出たことのない女の不安が、肩に添えられた手から伝わって来るようだ。

「大丈夫だよ、ティータ」

二十歳近くも年上の女に向かって、今度は幼女の方が声をかける。

「大丈夫だよ。とーさまやリヒトが来てくれるよ。リヒトは、いつも来てくれたもん。マーシィが迷子になった時、いつだって迎えに来てくれたもん。ティータのことも、きつと助けてくれるよ」

真剣な目で言われて、女の顔が僅かにほころぶ。

守るべき者に慰められては、世話はない。

「そうね。きつと助けに来てくれるわね。リヒトも、みんなも」

女の白い整った顔が、少しだけ和らぐ。それを敏感に感じ取り、マーシィはぶいとそっぽを向いた。

「マーシィ?」

「ティータはリヒトが好きなの? リヒトとけっこんするの?」

絶句する、ティータ。白い面が、こんな時だといつのに紅潮する。

「マーシィ、リヒトが大好きだよ。だからリヒトとけっこんするの。」

とーさんもーさんも大好き。だからみんなとけっこんするの」

更に言葉を失った後、思わず吹き出す、ティータ。似たような台詞を遠い昔に聞いたことがある。

そう。外でもない、この幼な子の叔母に当たる少女の口から。

「さすがに、レイスタの女は肝が座っているようだな」

不意に。

陰々たる声が、闇の中に轟いた。

はっとして顔を上げるティータの前に、長身の影が落ちる。

マーシィの小さな身体を背後に庇い、ティータは声の主と対峙した。

暗い、闇の色を帯びた金の髪。彼女らを見据える瞳は、深い蒼。

「しかし、助けを待っているようでは、まだまだ甘い」

口元に酷薄な笑みを張り付け、更に詰め寄る、男。

「炎の儀式は、三日後。炎の月の十三日。闇の日だ。レイスタの者が

忌み嫌う新月の夜だ。助けなど 当てに出来るものかな」

「とーさんは、来るもんっ!」

ティータの背後から、マーシィが叫んだ。

「とーさんは、強いもん。タソレガのセンチだもんっ!」

一瞬、男の眉が寄せられる。それは戸惑い?

何にせよ、気の強さでは定評のあるティータにとって、この援軍は

活力となった。

「あなたも傭兵なら、名前ぐらいは聞いたことぐらいあるんじゃない

い? この子の父親は隻脚のマイヤ。昔は『黄昏の戦士』と呼ばれて

いたそうよ」

もつとも右足を失ってから第一線を退き、長い。今のあの人に、自分たちを助ける力があるのがどつかは謎だけれども。

「懐かしい名だ」

男は、笑ったようだった。

そして、不意に腰に履いていた短剣を抜く。びくりと身を竦ませる

ティータの足元に、甲高い金属音が響いた。

「生贄になるのが嫌ならば、自ら命を断つのだな。その度胸があれば、

だが」

「レイスタの女を甘く見ないで!」

瞳に気丈な色を漲らせ、ティータは叫んだ。

「誰が、お前達のためなんかに、死んでやるものか。必ず、生き

抜いて見せるわ」

「確かに、気の強さは一級品だ」

笑いながら立ち去る男。ティータは、力が抜けたように崩折れた。

視界の端に、男が残して行った短剣が鈍い輝きを放っている。

「泣かないで、ティータ」

マーシィが、その細い身体にすがりつくように語りかける。

「泣かないで。きっと助けに来てくれるよ。とーさんもリヒトも。絶

対、来てくれるよ。大丈夫だよ」

コルノスの西、テートの街。

大陸では随一と言われる港街ならではの賑わいが、今日もテートを満たす。

街道を行く美しい花売り娘。屋台の主人。豎琴を抱えた吟遊詩人の、美しい歌声。

毎日が活気に溢れ、祭にも似たさんざめきが街全体を覆っているようにさえ見える。

「よう、ミアナ。今日はやけに早いじゃねえか」

急ぎ足でコーセア大路を進む、長い艶やかな黒髪を首の後ろで無造作に束ねた少女。巷では多少は名の知れた賞金稼ぎ『暁の剣士』のミアナ。は、屋台からの声に振り返った。

「この時間からとなるとお仲間のお呼びか？ 丁度、鳥が焼ける所だ。持って行けよ」

頭の禿げかかった親父が、香ばしい匂いを上げる山賊焼きを手早く裏返すのへ、

「悪いわね、いつもいつも」

笑顔で答えつつちゃっかりと屋台に腰を下ろす、ミアナ。下手な遠慮はこの界限ではご法度だ。もらえるものは、相手の機嫌がいろいろにいたただいておく。それが下町の常識だった。

「何を水くせえこと言ってるやがるんだか。俺はあんたのファンなんだ。これくらいは当然のことさね。で、今度はどんな仕事なんだ？ ま

た誰かの護衛か？」

「今から聞きに行くところ。ま、売れっ娘も楽しやないわ」

「言ってくれるねえ。何にしろ冒険譚を楽しみにしてるよ。あんたのいない『アクリア亭』なんざ、火の消えたようなもんだ」

火がついたらあたしが困るんだけど。と、ミアナが笑つ。

「あつ、ごめん。三本でいいわ。カルは苦手だから」

機嫌よく出汁をかけていた親父の手が、不意に止まった。

「けつ」

不機嫌に、吐き捨てる。

「まーだそんなこと、言ってるやがるのか。あのへば占い師は。だから背が伸びないんだって言ってやね。それでも食わなきゃ罰当りだとな。ハルク特製の山賊焼。『肉の旨味と他では喰えない出汁が自慢』だぜ」

「伝えとくわ」

くすくすと笑いつつ、香ばしい匂いのする鳥の包みを受け取る、ミアナ。

この愛想の良い少女が、剣を持たせれば一騎当千と噂される『暁の剣士』だとは、その剣技を目の当たりにした者でも、おいそれとは信じられないことだろう。

「じゃあ、行くわね。ありがとつ、ハルク」

「ああ、気をつけて行っておいで」

とてもじゃないが「戦士」を送り出すようには聞こえない口調で、屋台の親父はミアナを送り出す。

「お土産買って来るからね」

と、こちらも場違いな台詞で店を出る、ミアナ。

「相変わらず元気だねえ。あの娘は」

その後ろ姿を見送りながら、屋台の親父は笑う。

妙に、女じゃないところがいいんだなあ。俺にもあんな娘がいたら……。うん。絶対に賞金稼ぎなんかにはしない。酒場の給仕つてのもどうかと思う。いやいや、自分の娘じゃないからいいんだな。うん。うん。

勝手に納得しつつ、店内に視線を戻す。

と。

「親父、勘定はここに置くぞ」

屋台の奥に腰掛けていた一人の傭兵らしき男が、その傍らをすり抜けた。

「ああ、毎度……」

言いかけた、ハルクの目が、点になる。

そこに置いてあったのは、百セラン銀貨が一枚。庶民の目には滅多に触れることのない代物だ。こんなもので払われても釣りの出しようがない。

「ちよつと、お客さん……」

が、太った身体を揺すりながら、カウンターをくぐり抜けた頃には、男の姿はコーセア大路のいきれの中に消えていた。

「まあ、いいか」

何か釈然としないものを覚えつつ再び店に戻る、ハルク。

余程いい稼ぎでもあったのだろうか。払い過ぎたと解れば取りに戻るだろう。ま、次に見かけた時にも……

「？」

そういや、どんな顔だったっけ？ 顔を覚えることにかけては自信がある筈なのだが、この俺も耄碌したかな？

何にせよ、この銀貨は暫く夢に見るだろうな。

銀貨を懐の隠しにしまい込み、ひとつ首を振ると、ハルクは通りに向けて大きな声を張り上げた。

「お客さん、いい鳥が焼けているよ。他では喰えないハルク特製山賊焼だよ。肉の旨味と出汁が自慢だ」

まだ、湯気を立てる鳥を抱えつつ、ミアナの姿はいつしか人込みを避け、俗に「モアラ小路」と呼ばれる怪しげな通りへと足を運ぶ。運命を司る三人の乙女の長女。モアラの名を冠したその小路は、いわばテートの裏の世界。怪しげな呪術師、占い館、掛場。あるいは太陽の下に出ることのない日陰者やならず者が集う場所として、港町テートの暗黒街とも言える場所である。

その、迷路のように入り組んだ界限を、少女は擦り抜けるように進んで行く。

いくつの角を曲がっただろう。既に大通りからかなり離れた所まで来て、ミアナは不意に立ち止まった。

「こんなところで、いいかしら」

眩きつつ振り返る。

「そろそろ教えてもらいたいわね。あたしに何の用？」

気付いていた。ハルクの店を出てからずっと後をつけている者がいることは。

人いきれをどんなに上手にかいくぐっても無駄だと解って、ここを選んだ。

一対一ならば、万が一の展開にも恐れはなかったから。

「ほう」

闇の中から贅嘆の声が漏れる。それに続いて姿を現す、黒いマントの男。

「気づいていたか。小娘だと思っていたが……」

さすがは、名に聞く『暁の剣士』だな。

言い終わらぬうちに、跳ね上げられるマント。ミアナの想像通り、その下には既に抜き身の剣が握られていた。

銀の煌めきが弧を描き、薄闇の中に火花が散る。

湯気を上げる山賊焼の紙袋が、地面に落ちた。

じんと痺れる右腕に左手を添えるミアナの額からは、玉のような汗が伝い落ちる。

何て、重い剣。それに 速い。

「よく受けた。さすがだ」

告げる男の口調の端々に感じられる、冷笑の響き。ミアナの頬がか

っと紅潮する。

なめる、なっ！

左を狙った渾身の一撃は、至極あっさり相手剣に阻まれる。先刻の攻撃の早さと言いつつ、この男ただ者ではない。

だが。

「成程」

男の黒いマントに、裂け目が走る。完全に塞がれたようで、ミアナの剣がその一瞬だけ速かったのだ。

「速いな。噂は伊達ではなかったか」

フードに手をかけながら、男は嗤ったようだった。ふわりと落ちたフードの下から、暗い金の髪がこぼれる。

思った通り、そのおもては若い。行っても三十歳には届いていないだろう。

「『暁の剣士』ミアナ。かつて『黄昏の戦士』と呼ばれた男の妹」

「よく知っているじゃない」

力で返される剣を横に飛んで交わしつつ、ミアナもまた口元をほころばせる。

「あたしの方も聞いておこうかしら？ 『暁の剣士』に剣を向ける馬鹿の名前を、ね」

「自信過剰も冗譲りか」

再び、金属音が響いた。

ミアナの全身に戦慄が走る。

危うい所で止めたのは奇跡に近い。男の右手がいつものように動き、その剣がどのような軌跡を描いたのか、ミアナには全く見えなかった。本能的な剣士の勘だけが、ミアナの命を救ったと言ってもあながち間違いでなかつただろう。

男が、笑う。

「死に行く者に、名乗る必要はなからう」

ミアナの剣が風を切る。男は後方に跳んでそれを躲した。

「たいした自信ね」

「それでもない」

今度は、男が仕掛けた。素早い身のこなしでそれを受け流す、ミアナ。これだけの重い剣を何度も受けていれば、剣のほうもきつとぼろぼろだろう。近々買い替える必要がありそうだ。

その心配は、こいつを何とかしてからだが。

何度か目の火花が散った後に、ミアナはじりと後退する。

切迫した実力を持つ者を相手にする場合には、僅かな隙さえも命取りだ。

焦りは禁物。間合いを置いて、呼吸を取る。

相手の方もミアナを認めたらしい。太刀を焦ろうとはせず、じりじり之間をつめて行く。

無言の、対峙。

ミアナの切っ先が、小さく動く。

男がそれに反応したと見るや、ミアナの身体がかき消えた。

その小柄な体格を生かし、高々と跳躍したミアナ。彼女の姿を見失った男の一瞬の間隙をついて、思い切り剣を振り下ろす。

手ごたえはない。失敗しまった。

切ったのがマントだけだった。そうと気付きながら、ミアナは振り返る愚を犯さなかった。そのまま、待つ。

殺気、前から！

再び剣と剣とがぶつかった。

「ふうん……」

知らず、ミアナの面に凄惨な笑みが浮かぶ。

剣士として、強敵に出会うのは彼女の望むところだった。

相手が強ければ強いほど、自分もまた強くなれる。躊躇なんて言葉は初めて人を殺めた時に、忘れた。

生きる為に、生き延びるために、強くなる。強くなれる。

(待つて、待つて、じらして…フェイント！)

剣に生きる者として、男の癖は手に取るように解った。多分、相手にしても同じなのだろう。互いにこれだけ剣を交わしていても、致命傷には至らないのがその証拠だ。

(焦るな。死に急ぐことはない)

そう告げたのは、マイヤ。一番上の兄は戦い方を教えてくれた。女である以上に、戦士として生きることを選んだ時。

(腕力が劣る？ 身長が足りない？ そんなことが言い訳になるか。女扱いするな、なんて子供じみた考えも捨てる。一度、何もかも捨て

てしまつて 自分に一番合った戦い方を身につけるんだ)

(意味が解らない? 甘つたれるな。自分で、答えを導き出せ)

賞金稼ぎなど、伊達や酔狂で出来ることじゃない。身を守ったり、獣を狩ったりすることとも、違う。

それを身をもつて教えてくれたのは、マイヤ。戦いで右足を失うまでは、ミアナにとつてたつた一人の英雄だった、兄。

(よくやった、ミアナ。今のお前に俺に言えるのは、生き延びろというただけだな。そうすればきつと、勝機は見えてくる)

賞金稼ぎに名誉は必要ない。大切なのは勝つことではない。負けな  
いこと。生き延びること。

(フェイントと見せかけて、突いてくる!)

先に焦りを見せたのは、襲撃者の方だった。勝負に出た時の隙を、  
見逃してやる程ばかりではない。

「もらつたつ!」

敵の攻撃をかいくぐり、剣を突き出した。瞬間。

「!」

まともに、男の目を見てしまつ。

そして、初めて気づく。男の額を飾る、サークレット。それは魔  
道に関わりがあるものを意味する。

兄は、言っていなかったか?

(もう一つ。世の中には、『魔剣士』と呼ばれる者がいる。妖術を使う  
『戦士』は、かなり怖いぞ)

まんざら脅してもなく身を竦ませて見せた、兄。

まさか。いや、万が一そうであつたにしても、襲撃者に何が出来  
る? この攻撃をどうやって躲すというのだ?

伊達に、魔道師を仲間には持つていない。魔法を使うには、それな  
りの集中が必要なのは知っている。

ミアナに迷いはなかつた。渾身の力を込めて、切りつける。

「かかつた、な」

男の蒼い瞳が、不意に膨れ上がったような錯覚が、あつた。

底知れぬ蒼い湖が、彼女を飲み込まんと言を開けたかのような。

そして、それと共にミアナを包み込む脱力感。がっくりと崩れた身  
体から、力が抜けて行く。

何かの術にかけられたことを、知る。

「ひ、きょう……」

剣を杖に何とか立ち上がるうとするが、手も足もぴくりとも動かす  
。

男が、剣を取り上げた。

「悪く、思つな」

鈍色の刀身が、不気味に光る。

が、そのおもてに浮かんだ一瞬の表情は、何だったのだろう。

贖罪?

「暁の剣士の首、もらつた!」

少女の瞳が堅く閉じられた、時。

風を切るような音が、少女の横を走った。そして何か重量のあるものが倒れたような音。

「人の家の前で殺生は困るな」

聞き慣れた声が背後からかけられる。

「どうしたんだミアナ。君らしくもない」

若き魔道師は、指先で印を結びながらミアナと男の間に立ち塞がる。

「余計なことを……と、言いたい所だけ」

とりあえず、お礼は言っておくわ。

憎まれ口をたたきつつよるよると立ち上がる、ミアナ。

それを見届けた後で、上級第二位 ル・シエルの称号を持つ魔道

師カル・ファンスは、先刻自分が放った風の結界に捕まっている男に向けて歩を進めた。

「何者かは知らないけれど、かなりの使い手のようだね」

男は、苦い笑みをカル・ファンスに向けた。

「そっちこそ、ル・シエルの称号は、伊達じゃないようだな。だが、

俺は魔道師が嫌いだな」

「エリート意識が強いから？ まあ妖術使いは、たいていそう言うけどな」

カル・ファンスの指先に、黄金の輝きが宿っている。魔道師達が

『魔法の矢』と呼ぶ攻撃魔法だ。

「何故、ミアナを狙ったんだ？」

「答えると思つか？」

男の手が、動いた。

即座に魔道師の指先から放たれる、魔法の矢。それが襲撃者の右肩を貫いたのと、男の放った飛剣が慌てて割って入ったミアナの剣によつてはじかれたのは、同時だった。

だが、動きが鈍っている今のミアナには、それだけで精一杯だ。

「また、逢おう。『暁の剣士』」

一瞬の不意をつくよつに、男は身を翻す。

二発目の魔法の矢は、闇の中に消えてしまう。

小さく舌打ちをしてから、自分を庇った後で再びへたり込んでしまったミアナに手を差し出す、カル・ファンス。

「しかし、魔剣士か。あまり割りのいい職業しごくじゃないんだけどな」

「あら、魔道の使える戦士なんて、ほとんど無敵じゃない」

差し出された手に捕まりながらも、現にそれによって命を奪われかけた本人が反論する。

「そんなに簡単じゃないんだよ。魔道を習得するにはそれなりの代償が必要だし、色々制約があるんだ。魔剣士が過去に奨励されたのは、

多分『聖戦』の時ぐらいじゃないかな」

魔力を持つものは、必ず『魔道の塔』の監視下にある。

魔力を持ちながらも魔道師の地位を得る事が出来なかつた者を『妖術使い』と呼ぶが、その『妖術使い』の中でも魔剣士は特に地位が低い。

良くて、上級魔道師の護衛。大抵は賞金稼ぎに流れるが、賞金稼ぎ

という職業そのものが『魔道の塔』にとって最悪のランクであった。

「賞金稼ぎにしかねないから、賞金稼ぎで『魔道の塔』禁を犯し、処分された魔剣士の数は知れない」

別の賞金稼ぎに狩られたりね、と、苦笑まじりに付け加える。

「でも、あんたも賞金稼ぎじゃない」

「僕は気をつけてるだろ？ 魔道師と関わらないように」

そういえば、そうかも。

何となく納得する、ミアナ。

彼が受ける仕事を厳選するのは、そこに理由があったのか。

それに、時にカル・ファンスは徹底して秘密主義なこともある。

「こちらも理由があつて言えないんだ。禁忌を侵すと君らにまで危険が及ぶからね。それだけは了解して欲しい」とは、初めて彼らが共に仕事をするようになった時に彼が告げた台詞だ。

その言えないことがえらく多いのも、どうかとは思つが……

『魔法の矢』を受けてもあれだけ動けるつても、気になるな」

男の残した血痕を懐紙で拭い取り、魔道師は眉を寄せた。

「普通に威力が弱かつたんじゃないの？」

カル・ファンスが手加減をしていたのだと思ひこんでいたミアナもまた、何だか嫌な予感を感じつつあった。

そうだ。あの男は自分と戦い、その後カル・ファンスの結界に捕らわれ、さらに魔法まで受けて　それでも、逃げおおせたのだ。

「二度と会いたくない相手だけど……ミアナを狙つたってことは、そ

うもいかないのかな」

現実には彼は、最後に告げた。「また会おう」と。

「とりあえず、中に入ろうか。みんな揃っている頃だ」

気分を切り替え、先に立って彼の家に向かう魔道師に、

「で？」

ずっと気になっていたが言うのを我慢していた台詞を、ついにミアナが口にした。

「タイミング、良すぎなかった？」

この小柄な魔道師が助けに入ったタイミングのことだ。彼らの勝負をずっと見ていたに違いない。

振り返ったカル・ファンスは初めて笑った。

「邪魔したら怒るだろっ？ 君は」

それは本当のことだったので、ミアナは大人しく彼に続いて門扉をくぐった。

「で……」

すっかり冷めてしまった鳥の足にかぶりつきながら、シェイ・ノイは冷めたような目を相棒に向ける。

「してやられたわけだ。あっさりとうぐつ。」

ミアナは、唇を噛んだ。実際にしてやられたわけだから反論の余地はないが、反論の余地はないが、腹は立つ。

「油断しただけじゃない。そうでなければ、この私が不覚を取るわけがないでしょ。」

強い黒髪で浅黒い肌の、いかにも戦い慣れた体格のシェイと、身軽でいて力強い技を持つミアナは、巷では『暁の剣士』と呼ばれる。互いに口では何だかんだといいつつも、つねに絶対の信頼を持って共に剣を奮って来た彼らであればこそ。シェイの言葉には遠慮がない。

「これだから女つてのは浅はかだって言うんだ」

「何よ。それが、相棒に向かって言う言葉？ 私がいなければ、あんなにかとつくにのたれ死んでいたんじゃない」

売り言葉に買い言葉。すらりと腰に履いた長剣を抜く、二人。

離れた位置で二人のやり取りを聞いていた銀髪の青年が「やれやれ」と呟きつつ、彼らの間に割って入る。

「邪魔しないでよ、レイ！」

「どけ、レイ。そのくそ生意気な姫に灸をすえてやる」

喚く二人に無表情な一瞥を向ける、レイ。

「やるならせめて……」

外でやれと、彼は言いたかったのだろう。

その言葉が終わらぬうちに、奥の部屋に通じる扉が開き、

「何だ。君ら、またやってきたのか？」

肩に使い魔の小猿を乗せたカル・フランスが、呆れたように告げた。

「家の中で剣は抜くなって、何度言わせたら気が済むんだ？ 今度やつたら本気でペナルティーをつけさせてもらおうよ」

家の主に言われて、二人は不承不承剣を収める。

「で、解ったのか？ 奴の正体とやらは」

「残念ながら」と、カル・フランスは先刻の襲撃者の血のついた懐紙を皆に見せる。

「この血を持つ者を辿ってみたんだけど……送った使い魔は途中で見失ってしまったみたいだね。どうやらあの魔剣士は、強力な魔道の力に守られているみたいだ」

定位地である占い板の前に腰をかける魔道師に、シェイ・ノイユの眉が寄せられる。

「魔剣士か。どんな奴だ？」

「くすんだ金の髪で、蒼い瞳だったわ。サークレットの石も、青」

ミアナの言葉に、魔道師が補足する。

「幻術使いだね。多少初級魔道の心得もあるようだ」

とは言え、彼には自分の放った使い魔を撒く程の力はなさそうだが、一応付け加えておくことも忘れない。

「あんたの魔法が、へボなんじゃないの？」

ミアナも一応突っ込んでおく。

魔法のことはよく解らないが、彼らのリーダーである魔道師の力は知っている。

仲間になって最初の頃は「けっこう便利」次いで「やるときはやるじゃない」と、思った。今では「仲間で良かった」とたまに思う。

特に、先刻のような時に。

「一言で言えば、嫌な相手だね。一筋縄じゃ行かないと思う」

肩をすくめる魔道師に、

「くすんだ金の髪に蒼い瞳の、魔剣士か……」

一瞬、シェイの目が遠くなる。

それは、追憶。賞金稼ぎを始めるきっかけとなった人々との出会い。

(おい、ガキ)

あの頃は、自分は『浮浪児』と呼ばれていた。

(もしも俺が戻らなければ そいつのこと、頼むぞ)

(そいつは強い。俺なんかよりずっと。だから、一人でも生きて行ける。でも、俺はだめだ。ダートを一人にしておけない)

(相棒だからな)

そう言っただけで敵地に乗り込んだ馬鹿は、確か魔剣士だった。

金髪で蒼い目をした、魔剣士。

ダート、イシル。そんな名前だった。

そんなに長い間、行動を共にしていたわけではない。肩を並べていたのは、数カ月と言ったところだろう。

ダート、イシル。そしてマイヤ。彼らに会った時から探し続けていた。本当の仲間。生命さえも共有できる仲間を。 彼らのように。

「 いいね？ シェイ？」

カル・ファンスの言葉に、シェイは我に返る。

「何か言ったか？」

彼らのリーダーである魔道師は深く深く、嘆息する。

どいつもこいつもと、ついつい愚痴を言いたくもなる。

「だから、そろそろ依頼人が来る頃なんだ。君の知っている人物らしから、交渉に参加して欲しいって言ったんだ」

「俺の知り合い？」

「テスト・ライン。沿海州出身の傭兵。なんか変な通り名があったかな。

彼が来るまでに話を詰めておくつもりだったんだけど とんだ邪魔が入ったからね」

カル・ファンスの言葉が終わるのを待っていたかのように、扉が叩かれた。

レイによって招き入れられたその人物 癖の強い赤髪、年の頃は

二十代前半。うっすらとそばかすの残る、少し愛嬌のある顔立ちの男

を前に、シェイは椅子を蹴るようにして立ち上がる。

「お前か。『裏切者』」

「生きてたか、『死神』」

互いに背中をどやしつけ、沿海州風の挨拶を交わし合う、二人。

「噂を聞いた時は耳を疑ったぜ。お前が女と組んで、おまけに魔道師の仲間までいるなんてよ。この目で見ても信じられねえや」

そこに集った一同をぐるりと周囲を見回し、レイに向けて手を差し出す。

「あんたがカル・ファンズか。俺は、テス・ライン。今はシルノアで傭兵をやっている」

よくある事なので、レイは普通に彼の手を取り微笑んだ。

「薬師のレイです。そっちの彼が、リーダーのカル・ファンズ」

小柄で童顔のカル・ファンズは、彼の實力を知らない者には魔道師には見えないらしい。

今日も、わざわざ魔道師のローブに着替え、額には上級魔道師を意味する聖樹を象った金色のサークレットが輝いているのに、この有様だ。

「昨日お会いしましたよね、テス・ライン」

苦笑するカル・ファンズに、

「え？ てつきり使いの小僧だと……」

テス・ラインはまじまじと若い魔道師を見据え、やっとその服装とサークレットの意味に気づいたようだ。

「あー、あんたがカル・ファンズだったのか。しかもあんたも人が悪い。あの時にちゃんと名乗ってくれよ」

昨日、『暁の剣士』を探しているという男と会った時に名乗った筈なのだが。彼の勘違いに気づきながらも訂正しなかったカル・ファンズにも否があるが　よくある事なので、訂正するのも面倒くさいというのが本音だろう。

とりあえず全員に椅子を勧め、ティーポットから良い香りのするフイラ茶を注ぐ。

落ち着いたところで、赤毛の男は今度はミアナに向けて手を差し出した。

「で、あんたがミアナか。シェイの新しい相棒がマイヤの妹だって聞いた時には、どんな大女だろうって思ってたんだけど　俺は、シェイの昔の相棒だ。口性のない奴あ『裏切者』って呼びやがるけどな」

そこで、いったん言葉を止め、にっと笑う。

「もつとも『相棒潰し』で『死神』のシェイとは、けっこう上手くやってたんだぜ。どっちが先に死ぬのか賭けてたんだが、これがなんと、どっちも死んでない」

シェイの相棒であったなどは、到底信じられないような饒舌振りを披露するテス・ラインに圧倒され、ミアナすら口を挟めない。

「相変わらずだな、お前は」

やがて、呆れたようにシェイ・ノイユが呟いた。

陽気な傭兵、テス・ライン。だが、彼が配属された部隊が全滅し、彼のみが生き残った。

故に、口さがない者がたてた噂。『裏切者』テス・ライン。あいつ

が部隊を裏切って、味方を窮地に落とし込んだのだと。

現に、あいつだけが生きていると。

噂の真偽はテス・ライン本人しか知らない。

「何しに来やがったんだ？ まさか世間話をしに来たわけじゃあ、ないんだろっうな？」

シエイに凄まれ、テス・ラインはしぶしぶ口を閉ざす。

「ナシユラはどうした？ 一緒じゃないのか？」

彼らが袂を分かった時、この赤髪の青年と共に居った女の名が口にされた瞬間、テス・ラインの顔が引き歪む。

やがて、重い声がそのよく動く口から漏れた。

「死んだ」

ゆっくりと息を吸い、テス・ラインは続ける。

『裏切者』の株がまた上がった訳だ。でも、俺だって今度ばかりは黙っちゃいない。あいつの仇が討ちたいんだ。だからここに来た」

赤茶の目が、真摯な色を宿す。

「力を貸してくれ。『暁の剣士』。あいつの甲い合戦に、ゾーラ教徒の討伐に力を貸してくれ」

沈黙が、周囲を支配する。

その中心に在ったのは、シエイ・ノイユ。黒い瞳を見開きテス・ラインを 否、その背後にある何かを睨みつけている。

「ゾーラ教徒だと？」

かすれた声が、その口から漏れた。

「そうだ。コルノス シルノアの国境にある昔の砦。そこに巢喰うゾーラ教徒の討伐が、俺たちが シルノア大公派、ネアード男爵から受けた仕事だった」

吐き捨てるように告げる、テス・ライン。

「傭兵に戻ったのが間違いだっただ。その戦いで、ナシユラは死んだ」

「ゾーラ教徒か」

黙ってテス・ラインの話に耳を傾けていたカル・ファンスが、考え深げに口を開いた。

「嫌な相手だね。あまり、お近づきにはなりたくない」

「それは、認める だが」

剣を取り、立ち上がる、シエイ。

「俺は行くぜ。カル。ゾーラ教徒には、かなり貸しがあるからな」

「お前ならそう言ってくれると思つてたぜ、シエイ」

再び背中をどやしつけ合う、元相棒の剣士達。カル・ファンスが仕方なさそうに嘆息する。

そしてミアナは。

仲間達のそんなやり取りを横目に、傍に立つレイの腕をつんつんとつつく。

彼女の言いたいことを理解したレイが大きな溜息をついた。

「聞いたことぐらいあるだろう？ 拝火教って言ったら解るかな？」

ああ、と、ミアナが小さく呟いた。

滅亡の時、全ての者はゾーラの火に焼き尽くされ、浄化される。そこから新しい世界が生まれるのだと言う、そんな教えがあるのを知っている。その狂信者が、類似希なる力を持ってその新たな世界とやらを造ろうとしていることも。

あの、炎の狂信者は始末に終えない。

それは、傭兵や賞金稼ぎの中でひそやかに囁かれる。狂戦士とは、奴らの為にある言葉だ。まっとうな人間でいたいなら、奴らには関わらないことだ、と。

神の為に命を捧げ、信念の為に他人を平気で犠牲にする。

邪教であることはほぼ間違いないのに神殿が彼らを討たないのは、

彼らの報復を恐れているからだというのが、定説となっている。

そんなやつらと、本気でやりあう気？

ちらりと相棒のシェイを見遣ったミアナは、一瞬言葉を失った。

浅黒い表情に浮かんでいるのは憤怒、そして憎悪の色。

知らない。相棒のこんな様子、見たことがない。四年近く一緒にいるミアナには、見せたことのない表情。

「しかし、恐れるべきは狂信者ではない。あの　ダークブロードの魔剣士だ」

テス・ラインの言葉に、ミアナははっと我に返る。そしてシェイもびっくりと眉を寄せて、その言葉に反応した。

「蒼い眸で、背はシェイよりちょっと低いぐらいの？」

知っているのか？

驚いたようにミアナを伺うテス・ライン。ミアナの口がきゅっと結ばれる。

「読めたわね。最初から、そのゾーラ教徒とやらは解ってたんだわ。

テス・ライン、あんたがここに来ることを」

「だから、ミアナを襲った。言わば警告か」

カル・フランスの呟きに、唇を噛み締めるミアナ。

「嘗めた真似、してくれるじゃない」

そういうことならば話は別だ。これはもうテス・ラインだけの戦いではない。狂信者だろつが何だろつが、『暁の剣士』に手を出した愚を認めさせてやる必要がある。

「あたしも行くわよ、カル。売られた喧嘩は十倍以上の価値があるつてのが、うちの家訓なんだから」

ミアナの言葉は、『決定』を意味していた。

その家訓を作った人間の顔が見て見たいものだ、と、カル・フランスはひそかに思う。自分の一族の娘がこんなに無謀に育つと知っていたら、その者はその家訓を作っただろつか、と。

「二度と相手をしたくない者と、出来ればお近づきにはなりたくない連中が手を取り合っている。と言っわけですな」

椅子から立ち上がり、テス・ラインに向けて足を踏み出す。

「精神衛生的にかなり嫌な相手ですが　仕方ない。この仕事、受けましょう。ただし、報酬の半額は前金で頂きますよ。後、相手が相手ですから『魔道の塔』の介入は予め覚悟して頂きたい」

「有難い」

魔道師の小さな肩をがしつと掴み、テス・ラインが白い歯を剥き出す。その手を失礼のない程度に退け、カル・フランスは陽気な傭兵を見上げた。

「これは余計なことかもしれませんが、一言だけ。誤解がないように言っておきます。あなたは雇い主であり同志です。しかし、それ以上の存在ではない。シェイの相棒だったことは、我々にとって何の意味も持たない。馴れ合いを仕事に持ち込まれるのは困ります」

きつぱりと告げる。

テス・ラインは戸惑うようにその茶色の目を正面から受け

「心得た」

そばかすの浮いた顔に剣呑な色が浮かんだのは、一瞬のことだった。

「そんなつもりはなかったんだが　なるほど、彼がお前らのリーダーだっということがよく解った」

改めて、手を差し出すテス・ライン。

「失礼。性分です、これも」

差し出された手を、今度は拒むことなくカル・フランスが握り返す。

それは、『賞金稼ぎ』にとつての契約完了の証だ。

ほっと息をつく、ミアナはある事実に思い当たった。

「コルノス　シルノアの国境の砦って、もしかしてマールの砦？」

今では交流があるコルノス　シルノア両国も、かつては諍いが絶えなかった。

マールの砦と呼ばれる砦は、コルノスの猛将マールがその砦に居たことから呼ばれる名だ。

正式名称は、レイスタ砦。

コルノスとシルノアの国境にある峡谷の名に由来する。

「ああ。そうとも呼ぶな」

テス・ラインの眉が寄せられる。

「レイスタ砦のことだ」

レイスタの渓谷。

深い森と険しい断崖に囲まれた天然の要塞。そこにマール將軍は砦を作ったのだ。

「へえ、奇遇」

ミアナの目が輝く。

両国の間に国交が成立し、砦は役目を終えた。

今、国境を守っているのは近隣の住民たち。

レイスタ渓谷の森には三つの村がある。その中の一つ、アクール村の戦士達だ。

ミアナはその村で生を受けた。

「久しぶりにマイヤにも会えるかも知れないわよ、シェイ」

少し嬉しげに相棒を突く、ミアナ。

その言葉が放たれた瞬間、テス・ラインの表情が凍りついたような気がした。

訝しげな視線を向けるミアナに、今までと変わらぬ明るい笑みを向

け、シルノアから来た傭兵は明日からの旅の手順を並べ始める。

「決行は約一ヶ月後。炎の月の闇の日。それだけは、変えられない。その日にゾーラ教徒の会合があるとかで、奴らの正体を暴く絶好の機会なんだ」

闇の日かあと、ミアナは少し憂鬱になる。

それには理由があるのだが、日が変われないのなら仕方がない。『だったら、あまり時間がないな。君はどうするんだ？ テス・ライン』

カル・フランスの問いに、テス・ラインはすこし考える。

「シルノアに仲間を集めてあるんだ。俺は先にそっちと合流しないといけないから、連絡は現地でないが無理か」

言葉の間に、家の主は付近の地図を広げる。

「ミアナ、出番だよ」

いきなり名前を呼ばれ、考え事をしていた女剣士は我に返った。

「え？ 何の話？」

「君は現地の人間なんだろう？ 合流するのに効率の良い場所はないのかって聞いているんだ」

何故か機嫌が悪そうな魔道師の声に、ミアナは地図をのぞき込む。

「あ、ああ。だったらたしか森のこのあたりに樵小屋があるけど、この作戦はレイスタの人間は知ってるの？」

「いや、知らない筈だが」

「だったら、国境は越えられないわよ。そっちが早めにコルノスに入

ってくれないと」

渓谷と森を越えた所に流れる川が、ミノアとシルノアの国境。皆はそこに建っている。

そこはやや川幅が狭く、たまに密入国者がある。それを諷めるのが国境を守るレイスタの人間だ。

「解った。すぐに起つ」

「じゃあ、渓谷のここまで下がった方がいいかな。ここなら皆まで馬で数刻」

「そこで決まりかな？ じゃあテス。これを渡しておくよ」

いつから居たのか、カル・フランスの手には白い小鳥が乗っている。

「何かあった時には、そいつに伝言を伝えて飛ばせてくれ。レイスタにいったらこっちも飛ばすから 髪の毛か何かもらえるかな？」

「あ。ああ？ 何の為に？」

「旅の間に、君の臭いを覚えさせなければならぬからね」

言われるままに髪の毛を数本耨り、魔道師に渡すと、魔道師は鳥を傭兵に渡す。

「これ、どこから出したんだ？」

「うーん、と、カル・フランスは首を傾げる。

「帽子の中からかな？ 餌はやらなくていいけどたまに空気を吸わせてやって欲しいかな」

やっぱり魔道の産物かと、おっかなびっくり鳥を受け取るテス・ライン。

その様子に笑いながら、ミアナは思う。

「そういえばテスはどうして最初からその人たちをコルノス側に呼んでおかなかったんだろう。」

相棒の意見を聞こうと、そちらを伺うと、

黒髪の戦士もまた、自分の考えに沈んでいるようだ。

「シエイ？」

「あ？ ああ。話は終わったのか？」

「勘弁してくれ」

カル・ファンスが更に不機嫌そうに呻く。

「君らは、自分に興味があることしか聞いてないのか？」

これは、これからの作戦を左右する会議じゃないのかと、言いたいのだ。

「あ、だからさつきから機嫌が悪かったの？」

自分やシエイが、ちゃんと話を聞いてないから？

わざわざ確認するミアナに、彼らのリーダーはは頭をかかえ

ス・ラインは吹き出した。

「聞きたい事は、各自勝手に聞いてくれ。僕が聞きたいのは、砦に居る者のおおよその人数と、できればその内訳。後、シルノアにいる味方の人数。そして、報酬の前払い金の金額。どこまでの事を成せば作戦成功になるかの判断基準。以上」

言外に、「テスと別れる前に聞いておかなければならないことは、まだある筈だ」と語っているかのような物言いに。

栗色の髪 of 魔道師の機嫌をこれ以上損ねないため、各自が自らの質問に頭を悩ませたことは、言つまでもない。

どうも、おかしい。調子が出ない。身体が思うように動かない。

最初にそう思ったのは、テートを出てすぐ。ゾーラ教徒の狂信者が夜襲をかけて来た時だった。

それは日々募って行き テートを出て約一ヶ月後。レイスタに向けて最後の町を出る頃には、ミアナは絶不調のどん底にあった。

「かなり、悪いようだな。体調が」

シルノアへと続く街道を外れ、森を背にして野宿を決め込むことになった、一行。ささやかな食事の後で、薬湯を手にしたレイが気遣わしげな声をかけるのへ、

「別に。疲れているだけよ」

ミアナは不機嫌に応える。

何せ、最初の奇襲では彼らの泊まった宿屋ごと、焼き払おうとした敵である。おいそれと宿屋にも泊まればしない。

それぐらいで参るほど警戒には、出来ていない筈なのだが。

「ライラの花を煎じたものだ。心地よい眠りに誘ってくれる 今夜は、ゆっくり休むといい」

差し出された濃い紫の薬湯を、思いきり嫌な顔で受け取る。

「あなたに心配される程、落ちてないわよ。レイ」

一瞬、何とも表現しがたいような表情を見せるレイを前に思わず吹き出す、ミアナ。

「それとも心配してるのは、カル？ 様子を見て来いとも言われた？」

「正解だ」

素直に答えるレイに、ミアナは大きく息をつく。

「本当に、あんたらにまで気を使われるようになったらあおしまいだわ」

調子が出ない。身体が思うように動かない。

体調は、決して悪くない筈なのに 敵を前にした時、迷う。

これでいいの。自分はいつも何を考えて戦っていたのか、思い出せない。

こんなことでは戦士としては、命取りになるのは解っていた。でも 解らない。どうすればいいの、何がいけないのか、いつからこんな風になってしまったのか、解らない。

否、解ってはいたのだ。

すべてはあの晩、金の髪の魔剣士と戦った時から狂い始めている。本気で、殺されると思ったあの時から。

「これは一応もらっておくわ。でも大丈夫。ミアナさんは、そう簡単にはへばらないのよ」

そう、カルにも伝えておいて。あたしをあんまり嘗めるなって。

軽く笑い、レイを追い払う。

一人になると、たちまち襲ってくる疲労感が彼女を包んだ。

少し離れた木陰に身を寄せ、目を閉ざせば脳裏に浮かぶのは蒼の瞳。

彼女を正面から捕らえた、無気質な色。

休まなければ。

ライラの薬湯を口に含み、薄汚れた毛布にくるまりながら、ミアナは頭の中で反芻していた。

休まなければ。ここはもう、敵地なのだから。奇襲に備えて少しでも体力を回復しておかなければ。

薬湯の効果か、疲れ切った身体はやがて彼女を暗い闇の世界へと導いて行った。

剣が、敵の身体を貫く。

断末魔の悲鳴を上げて倒れる、男。

ミアナは、額に浮かぶ汗を拭った。

調子が出ない。体が重い。目の前が、妙にちらついて

「ミアナっ！」

カルが放った風の魔法　かまいたちがミアナの真横を通って、敵に襲い掛かる。一瞬、ミアナの動きが止まった。

金属音。

レイが、剣を手にミアナのガードに入っている。

「大丈夫か？　ミアナ」

「大丈夫に決まってるでしょ！」

苛立たしげに叫びながら、ミアナの足は地を蹴る。

背後で、カル・ファンズが新たな呪文の咏唱に入っているのが解る。

そして。

蒼い瞳が、彼女を見つめている。

無感動なまたたきが、彼女を捕らえている。

身体は、それだけで麻痺したかのように動かない　動けない。手も足も、その役目を放棄したかのように、ぴくりとも動いてくれない。

きつと、自分は恐怖に満ちた顔をしているだろう。

死を覚悟した彼女に向けて、振り下ろされる、剣。

声にならない悲鳴が、ミアナの口から迸った。

『こんな小娘が『暁の剣士』だと？』

朱に染まった視界の外から響く、声。

『笑わせるな。お前などに、何が出来る？』

何も出来ない。体が動かない。どうして？　何も恐れない『暁の剣

士』が、あの名前も知らない魔剣士に、何を恐れる？

「　だな」

緊迫感を孕んだ声に、ミアナは目を開けた。

夢？　でも、どうして？

自分の立場を理解できずに、ゆっくりと周囲を見渡す。

少し離れた所に、焚き火の炎。その回りには、二つの影が見える。

やつとのもので、昼間の戦いで不覚をとってしまったことが、徐々に

に思い出されて来た。でも、何だっであんな雑魚相手に……。

「だめだな、ミアナは　使えない」

力なく、それでいてはつきりと告げたのは、カル・フランスの声。  
ミアナの思考が停止する。

「今日のことではつきりした。ミアナは、魔道を恐れている。このままでは 完全に足手まといだ」

「待つ……」

跳び起きたミアナの後頭部に、鋭い痛みが走る。

頭を押さえながらも、立ち上がるミアナに向けられる、視線。

今までにない、どこか突き刺さるような視線。

「待つて、よ」

ふらつく足取りで、カル・フランスに歩み寄る女戦士に、魔道師は深い溜め息をつく。

「何よ、それ。誰が……」

「ミアナ、急に起きると……」

薬湯を手に立ち上がるレイの手を払いのけ、真っ向からカル・フランスに対峙する。

「聞き捨てならないわね、カル。あたしが足手まとい？ 魔道を恐れているって？ 冗談じゃ、ないわよっ！」

「ミアナ、悪いけどこっちも冗談で言っているつもりはないんだ」

ミアナのきつい眼差しを受け流しながら魔道師は淡々と告げる。

「外傷は、ほとんどないらしいね。相変わらず運はいいようだ。頭を少し打ったようだけど、具合は？」

「ちょっと頭が痛いぐらい。でも！」

まだ戦える。もう少し休めば、明日には回復している筈

そう続けようとしたミアナを、片手を上げて制するカル・フランス。  
「なら話は早いね。明日一番にテートに戻ってくれ。これは 命令だ」

「何で、そうなるのよっ！」

叫ぶ度に、頭に走る痛み。しかし、そのようなことなど気にしていられる状態ではない。

「あたしに解るように説明してよ。足手まといの次は『テートに戻れ』ですって？ 冗談じゃないわよっ！」

「ミアナ、君は……」

辛抱強く語りかけるカル・フランスを遮って、シェイ・ノイユが立ち上がった。手には抜き身の剣が握られている。

「抜け」

低く、ミアナに向かって告げる。

「こつするのが一番でっとり早い。抜け、ミアナ」

その目は本気だった。レイが慌てて割って入るのを今度はミアナが押しのける。

「そついう、こと」

言いながら、剣呑な笑みはその面に浮かぶ。

「なら、しっかりと目を開いて見ていれればいいわ。あたしが足手まといかどうかをね！」

言つが早い。ミアナは地を蹴った。剣が、銀の弧を描いてシェイ

に迫る。

勝負は一瞬でついた。

首筋に鉄の感触を受け、剣を下ろす、ミアナ。

「確実に死んだな」

剣を引き、くるりと背を向ける、シエイ。

「待つてよ……」

ミアナの口から、普段の彼女からは考えもつかないような、か細い声が漏れる。

「もう一度やってみてよ。今度は遅れを取ったりしない。もう一度だけ……」

我ながら、情けないことを言っている。それは解っていた。

でも、退くわけにはいかない。一人で帰るなんて冗談じゃない。死ぬ時は一緒だと、そう誓った筈の仲間だから。

「何度やっても同じことだ」

取り付く島も与えずに、きつぱりと言い切るシエイ・ノイユ。

「今のお前は、レイにも勝てない」

レイ本人にとってはかなり心外とも言える言葉を吐き捨て、焚火の向こうにどっかりと腰を下ろす。既に、ミアナの場合は顧みるつもりすら、ないようだった。

「そ、う……」

しばし項垂れて　しかし次に顔を上げた時には、ミアナは泣いていなかった。唇を堅く結んで、落とした剣を取る。

何か言おうとしたカル・フランスをきつい一瞥だけで黙らせて、

「大馬鹿、野郎」

痛烈な一言を残し、すたすたと歩み去るミアナ。

その後ろ姿が木々の間に隠れた頃、小さく嘆息したカル・フランスが、右肩に乗った使い魔の小猿に視線を走らせた。

主人の意図を悟つてか、小猿のアメリアーナは小さく啼くと、跳ねるようにしてミアナの後を追う。

それを見届けると、今度は所在なく立ち尽くしているレイに向き直った。

「明日、レイスタに入る。テス・ラインに連絡を頼んでいいかな？」

その手の中には、いつの間にか例の白い小鳥が在る。

そういえばそんな約束だったなと小さく頷き、レイもまた彼らの側を離れる。

「さて」

周囲が落ち着いた所で、カル・フランスはシエイの隣に腰を下ろした。

「君も、少しおかしいみたいだね？　シエイ」

その童顔に不似合いな、見透かすような目で問いかけられ不快げに眉をひそめる、シエイ・ノイユ。

「僕としてはもう少し穏便な方法を期待していたんだけどね、シエイ。

二人に言われたら、ミアナも立場がない」

「どんな言い方をしても、同じだ」

全く取り付く島もなく、シェイが告げる。

「お前の言う通りだ。あいつは魔道を恐れている。だから、間合いが取れない。敵に向かうと無意識に身体が引いている。雑魚相手ならまだしも、歴戦の戦士には、隙だらけに見えるだろうよ。」

「例えば」

カル・ファンスの茶色の目が、正面からシェイ・ノイユを捕らえる。

「この間ミアナを襲った魔剣士のような？」

沈黙。

その問いには答える義理も必要もないというようなシェイの態度に、カル・ファンスは困ったように息をつく。

「君らは、僕のことをどれくらい知ってるのかな」

「塔の魔導師のくせに、賞金かせぎをやってる変わり種」

いきなり予先の変わった質問に、シェイはぶっきらぼうに答えた。

「正解。でもそれ以前の事は？」

「知るか。お前がしゃべらないんだろう？」

この黒髪の戦士はいつも、他人に深入りしない。それはそれで気楽であったので、カル・ファンスも深入りはしなかった。だが、今回はかりはそうも言っていられない。

「テートを出る前に、調べてみたんだ。現在登録されている魔剣士は二十人余り。そのうち幻術使いは十二人。二十代、三十代の男性は四人。コラーン・リヴ、『黒き者』クシェリナン、ローダリアのベルチニ、そしてイシル・ラダ。賞金稼ぎで、『黄昏の戦士』と呼ばれていた」

シェイの眉が、ぴくりと上がる。気にせずにカル・ファンスは続けた。

「『黒き者』は除外できるだろう。その名の通り、黒い肌を持つ男だからね。コラーン・リヴとは面識がある。それと」

「イシルは、死んだ！」

たまり兼ねたように、シェイ・ノイユが叫んだ。

彼にその名を口に出させる為に、この魔導師は全てを知った上でこういふ方をしている。

「こちらも言えないことがあるから、そっちも話したくないことは話さなくていい」と、この魔導師は彼らに告げたことがある。

それは、まだ仲間と認めて無かった頃の話だ。

雇う者と雇われた者。純粹に「仕事相手」なのだ。必要以上に深入りしないのが良いのだと、納得していたが。

今でも変わらぬ彼のそういう性格が、シェイはたまに許せない。

「十年以上も前に、俺達は仲間だった。俺と知り合ってすぐに狂信者の手にかかって、死んだ」

それが、シェイの言う所の「ゾーラ教徒に対する貸し」とやらだったのだろう。だから、彼は真っ先にこの仕事を受けたのだ。

「でも、その死は確認されてはいない」

不意に、シェイ・ノイユが腰を浮かした。黒い目に危険な色を浮かべ、カル・ファンスを睨みつける。

「確かに、イシルは年齢が合わない。彼が生きていれば四十歳近い筈

だ」

その手が剣にかかる前に、辛うじて言い足した。用件を済ませたレイが心配気にこちらを伺っているのが、視界の隅に入る。

嘆息しつつ、シェイ・ノイユは再び腰を下ろした。

「それで納得しているわけじゃあ、ねえんだろ？」

低い声が、その口から漏れる。

「てめえは、どうしても俺の昔の仲間を敵に仕立て上げたいようだな。

カル」

押さえ抜いた憤りが、声の中にはあった。所在なげに、焚き火に薪をくべつつ、やがてカル・フランスがぼつりと咳く。

「解っている筈だよ、シェイ。合わないのは 年齢だけだ。闇に属する者ならどうにでも出来る」

それこそ、火に油を注ぐような一言。

剣の柄にかかった手が、しばしの逡巡の後に下ろされる。

「ああ、解っている。偶然にしちゃ出来すぎてやがるってのはな。イシルやダートの仇討ちのつもりだったんだが、どうも嫌な感じだ。畏れにかかったような気さえして来やがる」

「君は最初から気づいていた筈だね、その可能性に」

ミアナがダークブロードの髪の毛の魔剣士に襲われた時から、シェイは気づいていた筈だ。死んだ筈の彼の昔の仲間の存在に。

気づいていても、彼はそれを告げなかった。

それが今回の件に大きく波紋を残した。

「俺の昔の仲間が、手を貸せと言って来たんだ。相手は更に昔の仲間の仇だ。イシルとダートの仇なんだ。その仇の中に何故イシル本人がいる？ イシルが何故、俺たちを狙うんだ？」

憤りをはらんだ黒い瞳を、カル・フランスは冷静に受け止める。

「それは、本人に聞かないと解らないかな」

どうせ、すぐに会えるだろう。彼らはそのためにここまで来たのだから。

「それよりも聞いておきたいな。彼がもしもイシル・ラダだったとしたら、彼と対峙した時、君は」

カル・フランスの眼前に、銀光が閃いた。

「俺を、あまり嘗めるなよ」

陰惨な笑みが、剣を抜いた男の浅黒い面に浮かぶ。気の弱い人間が見れば、腰を抜かしそうな、危険な笑み。

「こちらら物心ついた時から一人で生きて来た身の上だ。誰であれ、俺に剣を向けたからは容赦はしない。 勿論お前でもな、カル」

剣を引くシェイ・ノイユに、穏やかな笑みで答える若い魔道師。

「それを聞いて安心した。決行は三日後だ。今、君にまで戦意を亡くされたら、打つ手がないからね」

話はここまでとばかりに立ち上がり、ふと思いついたように付け加える。

「あの魔剣士のことは、君に任せる。それでいいね？」

一瞬唖然とした後に、シェイ・ノイユはやっと口元を歪めた。

「カル」

低い声が、その口から漏れる。

「お前、俺の敵じゃなくて良かったな」

「お互いにね」

負けじと、不適な笑みで返す、カル・ファンズ。森の夜は、人間達のそんな思惑を包み隠すように、更けて行った。

4

夜明けの前兆である紫の色が東の空を染め始める頃、長い夜を一人で過ごしたミアナは、うつらうつらと船をこぐ。

『みんな、後ろを気にしながら戦う余裕なんてないんだよ、ミアナ』

『今の君は、足手纏いだ』

浅い眠りの中に反芻するのは、二日前のカル・ファンズの台詞。

ふざけるんじゃないわよ。ここまで来て、敵を目の前にして帰れるわけないでしょう？

馬鹿にするんじゃない。あんた一体何様？ あたしに、そんなごたいそんな口を叩けるような身分なの？ このあたしに、面と向かってそこまで言う権利があんたにあるって言うの？

言いたかった。言えなかった、台詞。

あるのだ、彼には。その権利と責任が。

初めて共に戦った時、命を預けられる仲間であると、そして剣を預けるリーダーであると認めたのは、ミアナ自身だったから。

だからといって認められるわけがない。自分が、足手まといだなんて。

『何度やっても同じだ。今のお前は　レイにも劣る』

相棒の言葉が、一番こたえた。

彼は嘘をつかない。ミアナの力を、その腕前を、誰よりも理解してくれている筈だったから。

あんたまでが、そんなことを言うの？ あたしがなくてどうする気？ 一人で戦つて言つつの？

言つてよ。お前が必要だつて。それだけでいいんだから。あたしは。

多くは、望まない。だから、追い出さないで。傍にいさせて。どうか 見捨てないで！

がくと首がずり落ちる感覚に、ミアナは現実引き戻される。

「かなり、こたえてるわね。これは」

頬を伝う水滴を拭い、苦笑しながら消えかけた焚火に小枝を投げ入れる。

最低、かもしれない。一人の戦士として世界に名を轟かせるまでは帰らない、などと大言を吐いて故郷を飛び出しておきながら 何をやってるのだからか。

情けない。未熟だ。最低だ。

「追いつく、からね」

長い髪を結び直し、気合を入れる。

「待つてなさい。きつと追いついて あたしが必要だつて言わせてみせるんだから！」

切り替えの早さは、ミアナの利点だ。悩んで時期を逸するよりは、取り敢えずぶつかつて見ることを、常に選んで来た。

大丈夫。ただでは砕けない、潰れない。

潰れるときは、相手にもそれなりのダメージを与えてやる。思い知

らせてやる。誰を敵に回したのか。

思い知らせ、後悔させて見せる。その代償の大きさを。きつと。

徐々に高揚していく意識の片隅。研ぎ澄まされた五感に、何かの気配が触れる。

取り戻されつつあるミアナの戦意に、反応するかのような、気配。少女の顔が一瞬にして、歴戦の剣士ものへと変貌する。

右 上？

ミアナの右手が、動いた。次の瞬間には閃く銀の光明が、そこから放たれる。

甲高い鳴き声が、夜の森に響き渡った。

凄まじい勢いで飛来して来た短剣を辛うじて躲した黄金毛並みを持つ小猿は、黒い瞳に憤りを湛えてミアナの前に降り立つ。

「ア、アメリカ？」

あまりの仕打ちを咎めるように、ひとしきり喚くアメリカーナをつまみ上げ、呆れたような声を上げる、ミアナ。

「あんただったの？ 悪かったわよ。そんなに暴れないで。ちゃ

んと謝つてるでしょ？ こら、髪を引っ張らないの。痛いってば」  
喚くだけ喚くと気が済んだのか、ミアナの肩に飛び乗り毛づくろい

を始める、アメリカーナ。

毒気を抜かれ一瞬和らいだミアナの表情が、次の瞬間には厳しく固まる。

「あたしを、追つて来たの？ お前の主人に言いつけられて」

愛らしく、くるくると動く黒い眼がミアナを見上げる。しかし、ミアナは知っていた。この小猿はただの愛玩動物ではない。常にカル・フランスの命によって行動する、彼の使い魔。

「見届けに来たの？ あたしが本当にテートに帰るかどうか」

再びつまみ上げられ、かわゆらしく小首をかしげる、アメリカーナ。「とぼけるんじゃないってば。知っているんだから。あんたがあたしの言葉をちゃんと理解していることくらい」

ミアナの手からなんとか逃れようと、小猿はじたばたと手足を動かす。どうやら、何を言っても無駄らしい。

大きく息をつき、そっと小猿を地面に降ろす。

「アメリカ」

見つめ返す大きな眼に、ミアナは低い声で告げた。

「帰りなさい。ご主人の所に」

応えない、愛玩動物の瞳。苛立たしげに顔を背け、ミアナは立ち上がる。

「いいわね、帰るのよ」

言い捨てると、焚火に土をかけて火を消す。

そろそろ夜明け。いたずらに時間を過ごしてはられない。

馬は森の入り口に置いてきた。ここからはしばらく歩きた。

このまま元の道に戻ればば、昨日までの仲間と鉢合わせるだけだ。ならば、森を抜けて皆の背後をつく。

それが、一晩のうちにミアナが出した結論だった。

幸いにも、この辺りはミアナにとっては庭のようなものだ。上手く動けば彼らが突入するのに前後して、突入できる筈。

問題は、コルノス シルノア間の国境を守るレイスタの民の目を、どうかいくぐるかだが。

(融通きかないものね。彼らは)

国境付近に潜むとなると、彼らは見逃してくれはしない。里帰りと言いつてもしようかとも考えたが、今、村に帰るのだけは絶対に自分が許さない。

『来る！』

不意に、何かが叫んだ。

はっと顔を上げ、周囲を見回す。黄金の小猿がその肩に飛び乗る。

「アメリカ、今……」

しゃべった？

いや、まさか。いくら魔道の産物だからって……。

そんなミアナに苛立つように、威嚇の声を上げる、アメリカーナ。

今度は、ミアナにも解った。

殺気。それも、覚えがある。

「お前か……」

剣を抜いたミアナの目が、一点を凝視する。

「待っていた」

ミアナは、笑っていた。

「待っていた。お前がもう一度、あたしの前に姿を現してくれる時

を」

「それは、光栄と言うべきだな」

暗い金髪の魔剣士が、茂みの中から姿を現す。

だが男は、剣に手をかける様子もない。

「どうしたの？ 今度こそ、邪魔は入らないわよ」

魔剣士は、口元を僅かにゆがめた。

「器量不足だ。女剣士」

ぴくんと、ミアナの肩が上がった。

唸りを上げて、振り下ろされる剣。男に向けて、一直線に走ったそれを、身体を僅かに逸らすだけで避ける。

更に剣を突き出した手首を掴まれ、捻じ上げられて、ミアナの手から剣が落ちた。

蒼い瞳が、間近に迫る。

「お前では器量不足だ。私を恐れている相手と戦っても意味がない」

「ふっ、ざけるなっ！」

ミアナの左手が動いた。

朝日に銀の刃が閃いた直後に、男の頬に朱の線が走る。

「誰が、誰を恐れているって？」

男の手をもぎ放し、短剣をその眼前にかざして、叫ぶ。

「見くびるな。お前など 憎みこそすれ、恐れるものか！」

掴まれていた右手首からは、じんとした痺れが伝わってくる。この分では、剣は持てない。

でも、ここで負けるわけにはいかなかった。

ここで負ければ、二度と 『彼ら』の元には戻れない。

その思いを振り切るようにぶるんと首を振り、男を睨みつける。

「剣を、抜け。あたしと勝負しろ」

そして男は。

頬から流れる生暖かいものをぐいと拭い 赤く汚れた右手の甲と、

ミアナの左手にある短剣を交互に見つめる。

「そんなに、死にたいか」

低い声が、朝の静寂の中に響いた。

すらりと抜き放たれた剣が、昇り始めた陽光を受けて輝く。

全身に震えが走るのが、自覚できた。それは死を直前にした肉体の、最後の抗議だ。

(戦いに死んだ者は、修羅となる)

(死して尚、永遠に戦い続けるのだ)

故郷を出て間もなくに親切ごかした旅の神官が告げて下さった、有り難い説教が脳裏に蘇る。

(いいわよ、それでも)

くすんと口元を綻ばせ、ミアナは短剣を構えた。

そこで、待っている。仲間たちを。

甲高い声が響いた。

風を切る鋭い音が、はっと顔を上げたミアナの耳を打つ。

魔剣士が後ろに飛びさるのとほぼ同時に、一つの影が二人の間に

割り込んだ。

朝日の中の黒い髪。

「シエイ？」

そんなわけではない。シエイが、ここに駆けつけるわけではない。彼は今頃、皆を指して直進しているか眠っているか、どちらかだろう。相棒の苦境を悟ってここに来るわけではない。

「双方、剣を引いてもらおう」

凜とした声は、やはり聞き慣れたものではない。主に魔剣士に注意を払っているせいで顔はよく解らないが、レイスタの民の誰かだろう。こんな所で、ぐずぐずしている場合ではなかったなと。半ばぼんやりと考える。

「勝負に水を差して申し訳ないが、場合が場合だ。国境付近に現れた他所者を見逃す程レイスタの民は甘くない」

男が言葉を終えるのを待たずに、さっと身を翻す、魔剣士。その手が目にも止まらぬ早さで動く。

寸分の狂いもなく飛来する矢を一刀両断にした剣は、黒髪の男の背後、新たな矢をつがえる金茶の髪の青年に向けられる。

剣から、紫の閃光がほとばしった。

「う、わっ！」

青年の手から放たれた矢が見当違いの方向に飛んで行き、彼の身体が紫の色彩に捕らわれる、直前。

飛んだのは、黄金の小猿。

小さな身体から立ちのぼる黄金の光明が、紫の色彩を打ち消す。

「使い魔か！」

舌打ちしつつ、今度は呆然とその様子を伺っていた黒髪の青年に向けて剣を振り下ろす、男。

不意をつかれた青年の剣がはじかれ、勢い余った身体は地に投げ出される。

慌てて飛び出したミアナの動きを、地に膝をついたままの青年に剣を向けることで牽制しつつ、男はゆっくりと告げた。

「レイスタの民よ。あの男に伝えるのだな。かつてのお前の仲間が会いたがっている、と」

体勢を立て直した金茶の髪の青年が新たな矢をつがえるのを認めてか、黒髪の青年をミアナに向けて押しやり、更に射手に向けて飛剣を投げつける。

再び狙いを外した射手と、だんご状態で倒れ込むミアナと青年。そこに居合わせた者たちの行動をそれぞれに封じると、魔剣士は即座にきびすを返した。

「伝えておくのだな。『黄昏の戦士』に」

「待てっ！ この……」

慌てて立ち上がるうとしたミアナの足を、黒髪の青年が掴んだ。

「逃がすか！」

結果、再びだんご状態で倒れる、二人。

「離せっ。馬鹿野郎！」

「誰が逃がすか！」

「ごろごろと転がりながらもめ合う二人の横を駆け抜け、金茶の髪の射手が魔剣士に向けて狙いを定める。が、やがて諦めたように弓を下ろした。

「どうして撃たないのよ、リヒト」

「届かないんだよ、この弓じゃ。そっちこそ、いつまで遊んでいるつもりなんだ？ ミアナ」

ミアナと揉み合っていた黒髪の青年の動きが、止まった。

「ミアナ？」

やっと緩まった男の手を押しつけるミアナに、金茶の髪の青年が手を差し出し、立ち上がらせる。

「やっぱり、リヒト。すぐに解ったわ」

リヒト 五歳年上のミアナの義兄。

アクルの村の民は、ほとんどが黒髪黒眼の単一民族である。明るい金茶の髪の弓の名手など、彼以外には居ない。

彼は元々隣村、ニースの村の出身だった。事故で両親を失った少年を引き取ったのがミアナの父親、ユナスだ。

昔のままの仕草で抱き着いて来たミアナの頭を、まるで壊れやすいものにも触れるかのようにおっかなびっくり撫でる手つきも、昔のまま。まれに、たよりなく映ったこともあったけれど、誰よりも彼女を可愛がってくれた、誰よりも優しくかった義兄。

と、先刻あの魔剣士の攻撃を防いだ後、ずっとリヒトの頭に座して

いた黄金の小猿が、自分の存在を忘れてもらっては困ると言いたげにミアナの肩に飛び乗る。

「アメリカ？」

どこことなく誇らしげな小猿の態度に、首をかしげる、ミアナ。

「ああ、さっき向こうでこいつに会って。あまり騒ぐものだから来て見れば、まさか、ミアナがいるとは思わなかったな」

「そう。取り敢えず、お礼は言っておくわ。ありがとうアメリカ。それにリヒトと」

すっかり無視され、見るからに不機嫌そうにしている黒髪の青年をまじまじと見つめ、やがて思い当たったようにミアナはぼんと手を打った。

「デュート。族長の甥っ子だ」

さらによく見れば、その右頬骨のあたりには先刻まではなかった赤紫の腫れがある。先刻、揉み合っていた間にできたものらしい。

「ご、ごめん。つい、本気で……」

「それは別にいい。しかし、先刻のあいつは一体何者なんだ？ あれは並の腕じゃないぞ」

「そもそも、どうしてミアナがここに居るのかを聞きたいな。街道からはかなり離れているし、里帰りなら方向が違つ。それどころか、こもまま行けば国境じゃないか」

先刻までとは違って変わった、リヒトの厳しい口調。ミアナの行き先がどこなのかは、しっかりばれているらしい。

大きく息を吸い込み、ミアナは正面からリヒトの視線を受け止めた。  
「仕事なの。時間がないのよ。ここを抜ければマールの砦の背後に回れる」

一瞬、レイスタの二人の青年の間に入った、動揺

砦は、国境を意味するもの。

「国境を越えるつもりはないわ。砦に用事があるのよ。みんなには絶対に迷惑をかけないって誓える」

「待て」

ミアナの言葉を遮ったのは、黒髪の 族長の甥デュートだった。

「その前に聞かせる。砦で何が起きている？ 先刻の奴はあの砦の奴なのか？」

別にあたしはあなたの部下じゃないんだけどな。と、心のどこかで呟く。

この族長の甥は子供の頃からリーダーシップばかり強くて、ミアナにとっては気に入らない部類だった。

でも、決して国境侵犯が目的ではないと証明する為には、ちゃんとした説明は必要だ。

「マールの砦に住み着いているゾーラ教の狂信者ってのが、今回のあたしの相手。何でも二日後に もう、明日になっちゃったか。何かの儀式があるらしいわ。あの男は」

久し振りの兄との再会に綻んでいたミアナの表情が、一瞬にして険しい女剣士のものになる。

「あたしの、敵」

でも、あいつ前もマイヤのことを言っていた。今も何か聞き捨てならないことを言っていないかったか？

「黄昏の戦士」に伝える。昔の仲間が会いたがっている、そう言わなかったか？

「ねえ、リヒト」

語りかけた兄もまた、険しい顔をしていた。

「明日、か」

デュートと目を見交わし、考え深げに腕を組む。

「やっぱり闇の日か」

「うん、と、デュートも木の根本に腰をかけ、頭を抱えている。」

「デュート、やっぱり俺が偵察に行く」

「射手のお前が一人で行くのはどう考えても無茶だ」

「何の話？」

二人の様子に、村で何かがあったらしいことは伺える。

そういえばこんな早朝に、彼らがここに居合わせたこと自体が不思議だ。しかも、この二人ってこんなに仲が良かったっけ？

「もしかして、砦に関わること？」

ミアナの問いに、二人は再び顔を見合わせる。

「話すべきだと思うな。俺は」

リヒトに促され、デュートは仕方なく口を開いた。

「まあ、ミアナもレイスタの人間だからな。実は数日前に女が二人、

行方不明になった。ティータは賢い奴だから目印を残していて、それを辿るとあの砦に行き着いた、というわけだ」

『女と子供』、『炎』、『国境の砦』。森で見つけた目印にはそう記されていた。昨日、川沿いに引つかかっていた女物の衣類の切れ端につけられていた印には『新月の儀式』そして『死』

デユートの言葉を次いで、リヒトが告げる。

レイスタでは、特に戦士の村アクールでは文字を解する者は少ない。よって、捕らわれた者たちは彼ら独自の伝達手段で自らの危機を知らせたらしい。普段、狩りの最中に傷を負った時や、獲物の位置を知らせる時などに使われるものだ。

「だが、罠である可能性もある。そもそもあの砦にそんな奴らがいっから住み着いたのか、俺たちは気がつかなかったんだ」

リヒトの言葉に、ミアナの目が点になる。

「気がつかないって あたしがテートを起したのは一ヶ月も前の話よ。それ以前にシルノアのなんとかって男爵が兵を挙げて……」

何だろう、話が合わない。

テス・ラインは今回の作戦はレイスタの民には伝わっていないと言っていたが、前回のものが伝わらないわけがない。

彼らは、国境を守る民なのだ。

「本当に、気がつかなかったんだ。だから対処が遅れた」

悔しげに唇を噛む、リヒト。

「闇の日は、レイスタの民は動けない」

狩猟民族であるレイスタの民の信仰の対象は『闇』を破るもの。即ち、『暁の姫』とその妹『月の姫』だった。ラ・ナ・レーンに愛された二人の姫。エミディアーナとリティス。それが、彼らの信ずる者。

故に、レイスタの民は闇の日 新月を忌み嫌う。

闇に捕らわれた『月の姫』リティス。それを助け出すのが、選ばれた『暁の姫』の戦士。普通の人間は、逆に闇に捕らわれるのみ。

谷を出たミアナでさえ、その慣習は未だに残っている。

賞金稼ぎを始めてからはそんなことを言ってもいられず、慣れたふり、忘れたふりをしてきた。それでも月に一度の闇の日を前にすると、気持ちの良いものではない。

ミアナの兄、マイヤが大怪我をしたのも『闇の日』だった。

だから、ミアナは自分たちの呼び名を『暁の剣士』に改めてもらったのだ。

「あたしも、行く」

ぼんやりと、ミアナは呟く。

まだ、考えがまとまらない。

テス・ラインが嘘をついていたの？ だったら、砦に向かった仲間達はどうなる？

そして。

砦に居るのは、何？

レイスタの民は、『闇の日』は動かない。それを狙って女を攫い、儀式を行おうとしている者。

「黄昏の戦士」マイヤを知る者。

それが、皆に居る。

「あたしも、一緒に行く」

「ミアナ？」

リヒトが怪訝な声をかける。

「どうしたんだ？ そういえば仕事だつて言っていたな。シェイは一緒じゃないのか？」

そうだ、シェイだって様子が変わった。ゾーラ教徒の話を聞いた時も、魔剣士の話をした時も。

カルは、最初からテスのことを信用していないように見えた。

自分とシェイがこの仕事を受けたから、つき合ったのだ。真実を自分たちに悟らせる為に。あの魔道師は、そんな奴だ。

「マイヤはこの事を知ってるの？」

「言ったら、飛び込んで行くだろ。兄貴は」

リヒトが苦笑する。

そうだ、確かにそんなことを聞けば真つ先に皆に向かう人だ。兄は。でも 今、兄に会えたらあの魔剣士の正体が解つたかも知れないの

に。

「族長には話したが……動くなと釘をさされただけだった。そんなことを兄貴に伝えるわけがない。他の奴らにも相談したんだが……」

つき合ってくれたのは、デュートだけだったということか。

『闇の口』を口に出され、皆尻込みしたのだろつ。

「テータたちを見殺しには出来ない」

族長の甥が告げる。

「だから、とりあえずリヒトと二人で偵察に出たんだ」

少しだけ、この族長の甥を見直してみる。

口だけの男だと、小さい頃からそういう目で見っていたことを少しだけ改める。

でも。

「じゃあ、あたしとリヒトで偵察も兼ねて皆に侵入しましょう。デュートはマイヤにこのことを伝えて」

「勝手に決めるなよ、ミアナ」

ミアナに仕切られ、むっとした表情のデュートに、

「決めるわよ！ 時間がないんだから！」

ミアナの一喝が飛ぶ。

どちらかには、村に戻ってもらわないといけない。ならば、同行するのは、リヒトだ。

リヒトの弓の腕は確かだ。そしてミアナはその兄の盾になる自信がある。

それにしても、しくじった。昨日一日くだらない事を考えていた時

間が、今はものすごく惜しい。

「で、攫われたのは誰と誰？」

荷物を手に立ち上がりながら尋ねるミアナに、リヒトが「そういうばまだ言っただけだったか？」と、告げる。

「ティータとマーシィ。俺の婚約者とマイヤの娘だ」

5 .

「時間だ」

カル・フランスが告げたのは、夕刻になりかけた頃だった。

昨日に一旦合流したテス・ラインと彼の集めて来た僅かばかりの『兵隊』たちは、既に皆の西で待機している筈だ。

「予定通り僕はこのまま正面に向かう。君たちもそろそろ行ってくれ」

これは戦争ではない。皆に立てこもっているのは、あくまで宗教者だ。人数で制圧すれば、あまたの宗教団体にいらぬ機会を与えてしまふ結果になる。邪教の証拠を掴まなければ、下手な手は出せない。

テス・ラインが最初の晩に語ったことだった。

(宗教の自由なんて法を定めた奴、殺してやりたいな)

そうすれば、こんなまどろっこしいことをする必要はなかったものを。と、いささか当てが外れたように愚痴っていたのは、シェイ・ノイユ。

が、今はその時とは少しばかり状況が違って来ている。

ミアナが去った夜から、必要以上どころか必要な時さえも口を開こうとしないシェイを見れば、先行きの不安を覚えずにはいられない。

カル・フランスにとっては頭を抱えたいような、チームワークだった。

テス・ラインによれば、近くの村の女が攫われて捕らえられているらしい。多分儀式の生け贄だろう。

「くどいようだけど、人命救助が最優先。儀式を暴くことが、その次だからね。面白くないのは解るけど……」

「本当に、くどいな」

ぶっきらぼうな一言が、カル・ファンスの言葉を遮った。それでも口をきいてもらえるだけ、まだましと言ったところか。

「後は、頼んだよ。大変だろうけど」

小声で告げるカル・ファンスに、レイはそっと苦笑する。

「お互い様だな。それは」

先の木陰で、苛々としているシェイ・ノイユの元に向かおうとしたレイの足が、ふと止まった。

「やっぱり、これはお前が持っていてくれ」

思い出したように懐から取り出されたのは、透明の、親指の先ほどの大きさの宝玉。見たところ何の変哲もないように水晶石に見えるそれは、精霊使いの守護石。幾体もの精霊達が自らその力を封じたものだ。

それさえあれば魔力を一切使わずに強力な精霊を召還できるという、魔道師にとっては貴重な代物だった。カル・ファンスもかつて、何度か世話になったことがある。

「忘れては、いないだろうな？ エル・カミーノ・レアル・シルウィスの名を」

レイがその名を口にした途端、透明であった石に様々な色彩が渦を巻く。

「万が一の時は、俺も奥の手を使う。細心の注意は払うつもりだがそんなものを持っていては、言い逃れが出来ないからな」

ばきつ、と、何かが折れるような音が響いた。

慌ててそちらを顧みれば、無残に叩き折られた木の枝と、大股で皆に向かうシェイ・ノイユの姿が目に入る。

彼の機嫌は最悪らしい。

「じゃあ、カル」

挨拶もそこそこに小走りにその後を追う、レイ。

「大変だね、本当に」

大きく息をつくと宝玉を懐にしまい込み、カル・ファンスもまた皆に向けて足を踏み出した。

「本当にこっちでいいの？」

迷路のように入り組んだ水路。それは、実際迷路だった。進みながら、ミアナが先導するリヒトに話しかける。

リヒトによれば、この皆は刑場の役目も果たしていたのだという。

この地下迷宮は、罪人を逃がさない為のもの。だからわざと入り組んで作られているのだ。

ここに入ってから、どれぐらいの時間が経ったのかすら解らない。皆をまつすぐ目指した方が早くなかった？」

「ミアナ」

右手を壁に当て、左手にはランタンを持って先導するリヒトが、疲れたように告げる。

「することがないから退屈なのは解ったけど……三度目だぞ、その質問」

そもそも、ミアナが言い出したのだ。

仲間と合流することは出来ない。

ならば、二人で皆に潜入するしかない。そこでリヒトの最初の予定通りこの水路を利用することにした。

ここは、リヒトにとって子供の頃からよく知っている場所。村の少年達の遊び場だったからだ。

「することがないなら信用していろって」

どうして、こんな所を迷いもせず歩けるのよ。ミアナとしては悪態をつきたくもなる。

「人間の造ったものには、どうしても癖が出る。入り組めば入り組む程。そいつのつもりになってみれば、その法則は読める。ネイルの受け売りだけだな」

唐突に出てきた下の兄の名に、ミアナは意外に思った。

「ネイルが、こんなとこに来てたの？」

そういえば下の兄とこの義理の兄は昔から仲が良かった。というか下の兄に懐いた子供は、リヒトだけだったと聞く。

体が弱くて、狩りにも行けない兄。無愛想で、かわいげがなくて

でも、家族の誰よりもリヒトのことを可愛がっていたのは彼だった。今はレイスタ唯一の『識者』と呼ばれている。

それがこんな場所で冒険をしていたとは驚きだ。

「一度だけだけだな。ほら、俺たちが真夜中に帰って来た時」

リヒトとネイルが夜半過ぎにぼろぼろになって帰って来て、父にこつぱどく説教されていたことは覚えている。確かネイルが熱を出して

……父がリヒトに手を挙げるのを見たのは、後にも先にもあの時だけだったから。

「そんなリヒトが、婚約ねえ……」

その台詞は、五回は口にしたかも知れない。

ティータ。

よく知っている。村で一番の器量良しと呼ばれていた娘だ。

そして、村で一番の気の強さだと囁かれていた娘。確か年はリヒトと同じだったか。

「リヒトって、気の強い人が好きだったんだ」

その言葉に、リヒトは咳き込む。

「お前が言つなよ」

どういう意味なんだろう？

「でも、知らなかったなあ。リヒトにこんな勇気があったなんて」

婚約者を、单身助けに来る勇氣。しかも村の若者は、誰も彼に賛同しなかったという。『闇の口』を恐れる村の人間にひけらかしてやりた

いものだ。

「俺は、アクルの生まれじゃないから」

と、リヒトは苦笑する。

「ニーサは元々、移民の村だ。アクル程に『暁の姫』の信仰は強くない」

言ってる間にも道を探る、リヒトの手。この迷宮はただの水路ではない。だからたまにとんでもない罠が仕掛けてあるのだ。

ミアナは今までに三度それに引っかかりそうになり、リヒトに注意力不足を叱られた。

「それも、謎なのよね。なんでリヒトはうちに来たの？」

勿論、この優しい兄が家に居てくれたことはミアナにとって良いことだったのだが、隣村の子供をわざわざ引き取る理由が解らない。

リヒトの歩みが止まった。

「あ、なんかあつた？」

「いや」

振り返った兄の顔にはいつもの穏やかな笑みが浮かんでいた。ミアナは気づかなかつた。

一瞬、彼の表情が凍り付いたことに。

「そつえば、ミアナはどうして成人の儀を前に村を出たんだ？」  
逆に兄に聞かれ、ミアナもまた困つたように笑う。

成人の儀は、レイスタの民にとって大切な儀式だ。主に十七歳以上の男女が行う儀式。男なら剣を持って獲物に挑み、それを倒してその首を森の精霊に捧げる。

女は織物でその勇者を飾る帯を織る。

たまに獲物をしとめる方に回る女がいたりもしたが 帯を織った

男はレイスタにはまだいない。

そうして成人した者は、始めて伸ばしていた髪を切る あるいは、

結び上げる。子供のことを「尻尾つき」と呼ぶレイスタ独自の成人の儀式であった。

ミアナはその儀式を受ける前、十六歳の時に「マイヤに負けない戦士になる」と言つて村を出た。おかげで彼女の髪は今でも三つ編みのままだ。

「だって、聞いちゃったんだもん」

「あたし、成人の儀を済ませたら村の誰かと結婚することになったんだつて。だからその前に絶対に村を出ようと思つたの」

それを聞き、リヒトは再び咳き込む。

「どうしたの？」

「いや……」

壁を調べる彼の手が扉に触れたので、その話は打ち切りになった。だから、ミアナは今度も知ることは無かつた。

そのミアナの相手が実はここに居る義兄で、リヒトはそのためにアクル村に引き取られたのだという事を。

リヒトですら、ティータとの婚約が無ければ知る由もなかつた族長の思惑。その思惑に潜んだ理由は、決して知らされることはなかつたが。

扉に耳をつけ リヒトは苦い顔をした。

素早く弓に矢を番え、低い声で一言。

「ミアナ、出番だ！」

扉を蹴り開けると、そこにはなめし革の鎧と小降りの剣で武装した見張りが二人。

一人をミアナが切り伏せると、一人の額をリヒトの矢が撃ち抜く。絶妙のコンビネーションだった。

「やるじゃない」

「そっちこそ、さすが『暁の剣士』ミアナだ」

当然でしょ。リヒトは手を出さなくても良かったのに。

などと笑いながら剣を収める、ミアナ。

リヒトの弓の腕前は知っていたが、実はあてにしていなかった。

せいぜい、肩あたりを撃って敵を牽制する程度だと。優しい義兄に人殺しが出来るとは思っていなかったから。

「俺だつて撃つよ。大事なものを守りたい時は」

二度と後悔しないように。義兄の言葉にはそんな思いが込められているような気がする。

「あ、今のはミアナのことじゃないから」

わざわざ付け加える所も、昔の彼とは少し違う。

「巢立った妹は、自分の身は自分で守れるようだからな」

周囲を伺いながら、リヒトは扉をくぐる。周りに人がないことを確認して、ミアナに対して頷いた。

「ミアナ、前に出てくれ」

敵がいると解っていて、射手が前に出るのは愚かというものだ。射手は常に後ろから戦士を援護する者。

了解と言いかけ、ミアナは兄を見上げる。

「リヒト。もしかして今、あたしのこと一人前って言った？」

「ミアナ、もしかして頭の回転が悪くなったんじゃないのか？」

「だって……」

甘えてばかりいた兄に一人前扱いされると 何となく嬉しくもあり寂しくもあり、それでいてくすぐったいような気がする。

彼を変えたのは、ティータなのだろうか。

だったら、いいや。義理の姉になる人が多少気が強くて。喧嘩しながら仲良くなつてあげよう。

扉をくぐろうと、柱に手をかけた時。

何かに、触れた。

とたんに、何か遠くで音がした。それに続いて地鳴りのような音が徐々にこちらに向かっていくような気がする。

「今、何をした？」

「わかんない」

解らないけれど 絶対に、何かをしたと思う。

そうこうしているうちに、地鳴りは大きくなっていき

どうしよう？ と、リヒトを伺うミアナに。

「そこを離れる！」

リヒトは妹の手を掴み、扉をくぐらせる。

その直後レイスタ皆地下迷宮で、凄まじい地響きが起こった。

「『魔道の塔』の者が、何の用だ？」

単身、皆の正面から乗り込んだカル・ファンズに、ゾーラ教の信者の特徴である赤い布地で頭部を包んだ男が、怪訝な目を向けた。

魔道師の証しであるサークレットを身につけているものの、今日のカル・ファンズは魔道師のローブは着ていない。普通の旅装束だ。戦いになると解っていて、あんなに動きにくいものは着てられない。加えて、元来の童顔に人懐こい笑みでも浮かべれば「とてもじゃないが、上級魔道師には見えない」と定評のあるカル・ファンズである。先方としても、対処に悩んでいると考えるのが、妥当だろう。「こちらにいる、未登録の『魔剣士』を引き渡していただきたいのですが」

にっこりと笑いながら告げるカル・ファンズ。一瞬、相手の表情をかすめた驚愕の色は見逃さない。

「そんな者は知らないとは言わせません。隠し立てするとためになりませんよ」

言っている間も、微笑みは崩さない。

しばし躊躇した後に、そこで待っているように告げ、男は姿を消す。「どう出るかな？」

待つ時間は長くはなかった。やがて扉が開け放たれ、先刻の男が姿

を見せる。

「入れ」

うながされるままに古い城門をくぐる、カル・ファンズ。その背後で扉は再び閉ざされる。

「やっぱり、そう出るわけだね」

抜き身の剣を手にした男たちがわらわらと現れ、カル・ファンズを取り囲む。そこに『魔剣士』の姿がないことを即座に確認すると、カル・ファンズはおもむるに印を結んだ。

小柄な全身を包む、閃光。それに遅れること数秒、激しい地響きと共に大地が裂ける。

「馬鹿なっ！ こんなガキに、こんな大魔法が」

「ゾーラに、栄光あれっ！」

口々に叫びながら、地割れに飲み込まれて行く者。恐慌に陥り、立ちすくむ者。

「あの魔道師は、どこだ？」

いつの間にかこの事態を引き起こした張本人が消えていることに気づいた者が、周囲を見渡す。

「待て、落ち着け！」

「幻覚だ！ よく見る！」

我に返った者たちの叫びをかき消すように、二度目の地鳴り。やっとの思いで立ち上がった者たちが、再び地に伏す。

まだ、日は高い。だから、儀式の夜が来るまでに出来るだけ敵を攪

乱する。それがカル・フランスに与えられた役割だ。

彼らの作戦は、そうして始まった。

6 .

「え？」

うまく砦への潜入を果たしたカル・フランスさえも、危うく体制を崩しかけ 何とか堪える。

一度目の地鳴りは確かに、地震の魔法と幻術を組み合わせたものだ。しかし、今のは？

「誰かが、へまをやったかな」

シェイじゃないだろう。彼には、自分よりもさらに慎重な薬師がついている。だったら、テス・ラインの手の者があるいは

「彼女に、一票」

前向きで、うるさくて、そして大切な。あの女剣士の一手か。

お陰で時間が少しでも稼げたのは事実だ。今のところはよしとしておこつ。

「で、次が来るわけだ」

近づいて来る足音を耳にして、カル・フランスは息を整えた。

取りあえず、可能な限り敵の目を引き付けておくのが役目である以上、ここは派手に行くしかない。

十人余りの人影が視界に入る。背後からは、やっと幻覚から立ち直った者たちの足音。

一呼吸の後。

きんと空気が鳴った。敵のただ中に生まれた幾つかの力場が、みる

みる凝縮して行き やがて、爆発する。

「一人で来て、正解だったな」

ずたずたに引き裂かれた廊下を見回しながら、カル・ファンズがほとりと呟いた。

ゾーラ教徒が根城にするだけのことはあって、この辺りは魔道の力場が作りやすいようだ。これで仲間が一緒にいれば、何らしかの巻き添えになったことは、間違いない。

「さて、お次は？」

その前に、今にも崩れ落ちそうなこの場所を離れておくべきかな？ などと思いつつ、周囲を伺う。黒い影がその視野を掠めた。

「久しぶりだな、魔道師」

暗い金の髪の魔剣士が、告げる。

「前言撤回だね。これは」

一人で来たのは、やはり失敗だったようだ。さすがに単身でこの男を相手取る程に無謀な性格はしていない。

「どうした？ 私を探していたのだろうか？」

腰に帯びた剣を抜きながら、魔剣士が笑う。青い目に浮かんでいるのは、揶揄。

「君の相手は、シェイに任せているんだけどね、イシル・ラダ」

「情報不足だな、それは」

銀の刃が一閃した。僅かな血糊と千切れた栗色の髪が、宙に舞う。

「ラダの名は、魔剣士を名乗った時に返上した。今は、ただのイシル

だ」

素早い攻撃に、防御結界を張ることも出来ないでいるカル・ファンズを、右、左と翻弄する魔剣士。

遊ばれているな、これは。

魔道師の足が、止まった。相手の蒼の瞳を正面から捕らえる、茶色の眼。

「戒律二十三条を、忘れたか？ 魔剣士イシル」

額から伝い落ちる汗と血をぬぐいつつ、カル・ファンズが告げる。

二人の額を飾るサークレットが、呼応するように輝き出したのは、その時だった。

「『道を誤ちし者は、同胞によりてその技を封じられるべし』。ル・シエル、カル・ファンズの名においてそなたの力を封じる」

閃光が、魔剣士を包んだ。

サークレットの力を借りて、一時的に妖術使いの技を封じる。それは、上級魔道師だけに与えられた特権だった。

だから、妖術使いは魔道師を嫌うのだろう。

苦しげな息を吐きながら、憎々しげにカル・ファンズを睨み付ける、魔剣士。同時にカル・ファンズの周りに、黄金色に輝く風の結界が生じる。

多分、これで勝った。魔道師は思った。

してやられた。魔剣士もそう思っているだろうと。

カル・ファンズを守る風の結界が、不意に消失するまでは。

彼の魔力は 一時的には言葉確かに封じた。まだ、サークレットは輝いている。

また、何者かがこの魔剣士を守った。強い魔力を持つ者が彼の魔法を破ったのだと、今度こそ確信する。

だが、今更それに何の意味があるっ。

魔剣士の蒼の瞳が光を宿す。

「お前は、死ぬ」

端正な面に苦悶の色を浮かべながら、淡々と魔剣士は告げた。

襲い掛かる銀の刃は、身を守る術を失ったカル・フランスには躲せない。

咎だった。

だが、その瞬間。魔道師は笑った。彼を見て 正確には彼の背後を見て、確かに笑ったのだ。

戸惑う、魔剣士。

甲高い声が響いた。

風を切る鋭い音と共に一本の矢が、今しもカル・フランスに向けて剣を振り下ろそうとしていた魔剣士の真横をかすめ、はっと後方に注意を逸らした魔剣士の顔に小さな黄金色の塊が飛びつく。その間に、カル・フランスの魔法の矢が魔剣士に放たれる。

「舐めるな！」

あるうことが、魔剣士は切った。魔法の矢を。

「下手くそっ！」

そして二人の間に割り込む、黒い影。

「仕方ないだろ！ 直線上に並べられたら！」

やや遅れて、魔剣士の後ろに回りこんだ人物が、怒鳴る。

「頭の位置が違うでしようが！ このちびとは！」

どさくさに紛れて、言ってくる。

思わずひとりごちる、カル・フランス。

直線上に並ぶ者に矢を撃てば、敵が避ければ味方に当たる。それは当然のことだ。

文句の一つも言いたい所だが、いつまでもここで遊んでいるわけには行かない。

久しぶりに主人の元に戻った使い魔の小猿を肩に乗せ、手早く。

ナ・レーン印を結ぶ。

それを阻むべく、魔剣士の剣が魔道師に向けられる。

そして、それを制するミアナの剣。やや離れた位置で間合いを取るの、金茶の髪の手。

勿論、接近戦の中に矢は打ち込めない。

ここで、時間を失うのは痛手であると、魔道師は判断した。

「彼を守る精霊たちよ。エル・カミーノ・リアル・シルウィスの名に力を貸したまえ」

極彩色が、カル・フランスの持つ精霊の守護石より放たれる。

その間に、仲間の女戦士とその仲間であろう青年の手首を掴み、カル・フランスはその場を逃れた。

「何で、逃げるのよっ!」

充分に離れた頃合いを見計らって、ミアナが喚いた。

「理由は二つ。彼の相手は、シェイに任せてある。そして、当事者のシェイは多分本来の目的を達しないに一票」

元はと言えば、シェイに隠密行動を任せる方が間違っている。が、人手が足りなかったのだから仕方がない。

「ここで、三人もの人数を、彼一人の為に裂く時間が惜しい」

確かに、今の有様は昨日の森での彼との邂逅に符合するものがあつた。あの時も、あいつは三人を手玉に取つた。

逃げるという手もあつたのかと、なんとなくミアナは思う。

そういえば、死んでもあいつと戦うことしか考えていなかった、昨日のミアナ。

それがどんなに愚かな事が、今なら解る。

そんなミアナに、カル・ファンズは不意に真顔で告げた。

「お礼を言わなければいけないね。助かったよ、ミアナ。ありがとう」

悪びれもせずに礼を言われて、さすがに調子が狂うのか、ミアナは少し照れたようにそっぽを向いた。

「別に。借りを返しただけよ。それより、解つたでしょ? あた

しの大切さが」

「最初から知っているよ。君があのまま帰るような人でないことは」  
くすくすと笑いながら、ちらりとミアナの背後に立つ金茶の髪の青

年に目を向ける、カル・ファンズ。

「まさか、援軍まで連れて来てもらえるとは思わなかったけどね」

「ああ」

思い出したかのように、ミアナもそちらを伺う。

「アクルーの射手、リヒト。あたしの兄さんよ。こっちは一応うちのリーダーの、カル・ファンズ」

「ミアナから、大体の話は聞いた。俺はこの砦に捕らわれている女たちを助けに来た。ぜひ、共同戦線を張らせて欲しい」

右手を差し出しながら告げるリヒトの、ミアナの兄だとは到底思えぬような丁寧な口調に、少し戸惑いつつ。

「有り難い。少しでも戦力が増えるのは、喜ばしい限りです」

その手を取り、にこりと微笑むカル・ファンズ。

「で、ミアナはこれからどうするつもりなのかな?」

「うーん決まってるのは、あんたを一発殴ってからシェイを蹴ることぐらいかな」

早速それかと笑つ。

「だから、それまではあんたのことを守ってあげる」

「でも、その前に」

女戦士が、真摯な視線を魔道師に向けた。

「教えて。この作戦は、テスの罠?」

「今、その答えに一番近づいているのは、多分シェイだと思うな。僕は、テスもまた罠に陥っていると思う」

珍しく不確定要素を口にする魔道師。

そして魔道師は、改めて告げた。

「それを踏まえて、君はどうする？ シエイと一緒にテスを追うか、僕と共に女性の救出に向かうか」

皆は、不意の『敵襲』にこった返していた。

怪しげな新興宗教だの、無敵の狂信者だのと言ってみても、所詮は素人の集まりに過ぎない。二方からの襲撃に、五十年前までは無敵を誇っていた皆の機能は全く生かされないまま、かなりの時が過ぎようとしていた。

そして、そのどさくさに紛れて内部への侵入を果たした人物が、二人。

かなりの長身で筋骨逞しい黒髪の戦士と、上背はそこそこあるものの連れに比べればかなり華奢に映る 肉体労働は不得手といった印象が強い、銀の髪的青年。

常に前線で戦って来た戦士として、このような役目を引き受けることとはかなり不本意なシエイ・ノイユと、やはり不本意ながらその補佐役を引き受けざるを得なかった薬師、レイであった。

「馬鹿馬鹿しく、なってきたな。俺は」

僅かに残った見張りを切り伏せたシエイ・ノイユが、思わずひとりごちる。

これが、巷で恐れられているゾーラ教の狂信者なのか。十三年前、

彼の仲間を死に至らしめ、更に八年前には相棒の右足を奪った者たちの成れの果てなのかと思うと、憤りすら覚える。

今回の旅の当初からの、たまりにたまった鬱憤をぶつけるかのように剣を振り回す、シエイ・ノイユ。自分の役目も人質が捕らえられているということさえも、全く覚えていないのではないかと危惧させる、それは見事な剣さばきであった。

「シ、シエイ」

さらなる獲物を求めて視線を巡らすシエイ・ノイユの腕を、レイの細い指が掴んだ。

「俺たちの役目は、生け贄の救出の筈だ」

「だから、声を上げられる前に屠しているんだろ？」

連れの問いにさも面倒くさそうに答える、シエイ・ノイユ。どうやら、冷静な状況判断能力は失われていないようだ。

「それから、忠告だ。剣を持った戦士の腕に不用意に触れるな。今は、叩き切られても文句は言えないタイミングだったぜ」

残されていた彼の状況判断力に感謝しつつ、レイもまた自分の役割 表向きはシエイ・ノイユの援護。実の所はストッパーとして同行しているということ忘れてはいなかった。

「おかしいと思わないか？ シエイ」

これと言った障害もなくここまでたどり着けるということは、計画にはなかった。それを結構なこと取るか畏と取るかで、全員の生死が決まるといっても過言ではないだろう。

「順調過ぎる。このまま行けば、テスやカルと合流する前に、孤立し  
かねない」

無然として、振り返るシェイ・ノイユ。彼の腕を疑うわけではない  
が、狂信者の真の恐ろしさは、この剣士も知っている筈だった。

「考えてみてくれ、テス・ラインはこの程度の相手に不覚を取ったの  
か？ シルノアの傭兵一個小隊を連れて？」

銀髪 of 若者を見返す、無感動な黒い瞳。僅かにひるみながらも、レ  
イは更に言葉を続ける。

「嫌な予感がする。これは 畏じゃないのか？ 俺たちは、最初か  
ら……」

「お前も、俺の昔の仲間を疑うわけだな」  
低い声には、彼を咎める響きはなかった。

くるりとレイに背を向け、壁に備え付けられていた松明を手取る、  
黒髪の剣士。暗い廊下の先で、下に続いている階段を照らし出される。

「このまま階段は、地下牢に続いている筈だったな」

無愛想に確認するシェイ・ノイユに、一瞬その意図をはかりかねた  
レイが、慌てて頷いた。

「ああ。テス・ラインの見取り図では、そうなっているが……」  
先刻の、レイの言葉はまさに正鵠を突いていた。

レイは、そして昨日の話ではカル・ファンズも、あの赤髪の傭兵  
シェイ・ノイユの昔の相棒を頭から信用することは出来ない。ここ

に来て、その感は強まる一方だった。

先に とりあえずテスと合流するべきではないのか？ 背後を取  
られてからでは、取り返しがつかない。その前に、安全策を張った方  
がいいのではないか？

そう言いかけたレイを残して、すたすたと階段に向かう、シェイ。  
彼は彼なりに、考えているらしい。が……

「シェイ、一人で先走るな」  
どんな考えがあるとしても、ここで止めなければ彼が同行している  
意味がない。

再び腕を取ろうとしたレイの前に、白刃が閃いた。  
「忠告、した筈だ」

さすがに肝が冷え、立ち尽くし よく腰を抜かさなかったものだ  
と、ぼんやりと考えるレイに、

「考えていても始まらない。多分、そこで答えが出る」

言い捨てた戦士の巨体は階下へと消えて行く。どうにか立ち直った  
レイは、深く嘆息するとその後を追いつ、階段を駆け降りた。

「ここが？」  
階下で、既に扉に取り付いているシェイ・ノイユに声をかける。

振り返った戦士の顔は、険しかった。  
「これが、地下牢の扉か？」

言われて、扉に注目する。  
朱塗りの扉には、見たこともないような異国の文字がびっしりと書

かれ、その中心には、文様化された炎が彫り込まれている。

見張りの姿は、ない。

「ゾーラの形式は知らないが、地下牢という雰囲気ではないな」

これが邪神のエンブレムでもあれば、まだ想像の余地があるのだが 何と言ってもゾーラ教については、情報が少なすぎる。

「そうだな。どちらかと言えば祭壇か集会場か、そうでなければ趣味の悪い教祖の私室、というイメージだ。偏見だと言われれば、それまでだが」

その返答は、シェイ・ノイユの気には召したようだった。浅黒い面に初めて、笑み その凄惨な面を、笑みと呼んでよいならば が、浮かぶ。

「珍しく意見が合うな。今回は」

言うが早いか取っ手に手をかけるシェイ・ノイユに、畏があつたらどうつもりだと言いかけ、神経質になりすぎている自分に、レイは気づいた。

自分たちをおびき寄せることが目的なら、こんな所に畏は張るまい。畏があるとすればむしろ、入り口ではなく出口にあるべきだ。

ゆっくりと辺りの気配を探れば、精霊の力は普段よりもずっと強く、ずっと近くに感じられる。

魔道師が、彼の守護石の力を使ったのだろつ。今、この昔は精霊の気配で満ちている。

大丈夫。これなら、万が一のことがあっても……

「どうした？ 入って来いよ」

シェイの声が、室内から響く。人の気も知らずにと言いたい所だが 確かに、ここでこうしていても仕方がない。肩を竦め戸口をくくり抜ける、レイ。

部屋の薄暗さに目が慣れてくると、そこはどうかやら広間のようにだった。

人の気配はなく、また階下の喧噪もここまでは届かず。元は納骨堂か何かであったのではないかと思わせるような、ひやりとした空間を、静寂が満たす。

そして、その奥。未だ火の入っていない何百もの燭台が造る通路の奥には 祭壇の上で幽けく揺らぐ、小さな炎。

びくりと、レイの身体が震えた。

何だ、これは？ これが拜火教の神体だというのか？ ただの炎であるわけがない。こうして遠くから見ているだけで、全身に悪寒が走る。

天然の、精霊の恵みを受けた炎であるわけがない。ラ・ナ・レーンの信者の中にも、炎の精霊カッソスを崇める者はいらる。常に聖火を絶やさぬ神殿もある。しかし、この炎はそれらとは全く違つ。

精霊にも、気質はある。炎の精霊カッソスは、乱にありて邪悪なる者を焼き払い、治にありては守護者となる。邪悪な者を寄せ付けぬ炎の壁は今も世界を取り囲んでいるのだと、伝説は語っていた。

しかし、そこにある小さな炎から発せられるのは 純粋な、破滅への欲求。

全てを焼き尽くし、その後自らも滅びる。そうして世界は再生されるのだ。ラ・ナ・レーンも、邪神ミゲルもない、新たな世界が生まれるのだ。

声にならない『言葉』が、レイに語りかける。

我と共に、有れ。我はそなたに力を与えるだろう。終焉は近い。我と共に、戦え。

誘なうように、炎が揺らめく。一歩足を踏み出せば……。

「どうやら、これが答えらしいな」

シェイ・ノイユの言葉に、レイは我に返った。

「やはり、畏か」

反射的に答えつつ、レイは今の感覚を思い出し、再び肩を震わせた。少し危なかった。レイの敏感すぎる第六感に嘯きかけた声の中には、恐ろしさに紛れて甘美な誘惑があった。刹那的な欲求を受け入れかけたのは、事実だ。

ここに居るのは危険だ。

「行こう、シェイ。ここに長居はしたくない」

声を震わせるレイに、シェイ・ノイユは怪訝な視線を向け、更に祭壇に目を向けた後に頷いた。

「同感だな。俺も、さっきからこう首筋がビリビリしてやがる。こんなこと 随分と、久しぶりなんだが」

シェイ・ノイユの言葉が終わらぬうちに、背後で大きな音が響く。

振り返らなくても、解っていた。畏を仕掛けるなら出口だと、そう

考えていたのは、つい先刻のことだ。

炎に注視するあまり、後方の確認を怠った。これは完全にレイのミスだ。

「馬鹿野郎！ 退路の確保は基本中の」

慌てて扉に取り付いたレイの後ろから、シェイ・ノイユの怒声が飛ぶ。

途切れた、罵声。息を飲む、シェイ・ノイユの気配。

振り返ったレイは、見た。

祭壇の炎が不意に膨れ上がり、ところ狭しと並べられた燭台に次々と燃え移った行く様を。

そして聞いた。韻々と響き渡る、女の声を。

『ゾーラの炎、我が主よ、新たな闘士を捧げます』

炎は、舌なめずりをするように彼らへと迫る。

『類い稀なる闘士よ。聖なる炎の中より新たな生命持て、我らの闘士として生まれ変わるが良い』

苛立たしげにレイを押しつけ、扉に取り付くシェイ・ノイユが、凄まじいまでの膂力を誇る戦士の一撃は、扉を僅かに軋ませただけだった。

そうこうしているうちに、左右の燭台に燃え移った炎は、二体の蛇のように、二人に迫る。

「やっぱり畏か！」

舌打ちしつつ剣を抜き、迫りくる炎を両断する、シェイ。が、実体

のない炎に剣が通用するわけもなく。

たちまち柄まで真っ赤に染まった剣に、若き剣士の口からくぐもった悲鳴が上がる。

肉の焦げる、臭い。

「馬鹿！ 剣を捨てろ！」

「誰が馬鹿だ！」

更に奮われた剣が、手近な燭台を倒した。一瞬そこに出来た僅かな空間は、あつと言つ間に熱気を孕んだ炎の壁に塞がれる。

剣ではどうにもならない。逃げ場もない。これは、ほぼ最悪の事態であった。

「シエイ」

凜然たる声が、レイの口から漏れた。

「下がってくれ」

そこに秘められているのは、命令することに慣れた者の人を従えることを当然とする者特有の、響き。

権威ある者のみが所有する、気質。一介の貧乏薬師風情が持つ筈のない、威厳。

レイの豹変ぶりに眉をひそめながらも退いたシエイ・ノイユに代わって、祭壇と一直線に結ばれた位置に立ち、レイは数歩足を進める。

目を閉ざせば、感じられる。あまたの精霊の気配。彼の身を案じ、彼の命を待っている者たちの、想い。

彼を守るべく集った精霊達の力が満ちている。今なら出来る。

ゆっくりと目を見開いたレイの前に、燃え盛る炎。そしてその向こ

うで彼らを手招く 紅蓮の深淵

『切り札』を、こんな所で使うのは危険かも知れなかった。『魔道の塔』に感知されたら、二度と冒険の旅などには出られなくなるだろう。

だが、悩んでいる余裕はない。そうしている間にも四方から迫ってくる紅蓮の炎が、それを許してはくれない。

「我が守護精霊、猛き者」

口を開けば、立ち込める熱気が喉を焼く。しかし、そんなことで参っていられるような状況ではない。レイはかすれた声で続けた。

「炎を司りし、カツソスよ。我が名は、レディスラン・エル・カミー

ノ・リアル・シルウイス」

囁くような声で、もう一言。

「フィルサーナ」

炎は、一瞬戸惑ったように見えた。

その隙を逃さず、肺に残された息を一気に吐き出す。

「カミーノの名を持ちし汝が仔に、力を与え賜え」

燃え立つ炎が、レイの身体を包み込んだ。それ見たことかとそちらに駆け寄ろうとしたシエイ・ノイユの前に、新たな炎が壁を作る。

「邪まなる力に捕らわれし同胞よ、我が声の届かば 我に、従いたまえ」

炎の中から、響く声。

一刹那、爆発的な勢いで燃え上がった炎は、唐突に消えた。

「終わった、のか？」

燻りすら残さず、消え果てた炎。その中心に立つ銀髪の青年に、シエイが低い声を投げかける。

「いや、まだだ」

少し焦げた髪を掻き上げ、レイは大きく息を吐き出した。

祭壇で、憤るように揺らめいている炎を見つめ、ゆっくりと息を吸い込む。

「我が守護精霊、疾き者。風を司りシファルルーンよ、レアルの名を持ちし汝が仔に、力を示したまえ」

密閉されているはずの部屋に、どこからか吹き込んで来た僅かな風が、レイの髪を波立たせる。

やがてそれは、暴風となってゾーラの炎に襲い掛かる。炎が、再び膨れ上がった。が、それは風の障壁にはじかれ、徐々に勢いを失って行く。

風の結界。本来は、術者の庇護すべき相手。あるいは術者本人を、風の精霊の力で外敵から守る時に使用されるのだが、このように力では齒の立たぬ相手を一時的に封じ込める時にも、有効である。

「ここまでだな。これ以上は、一介の精霊使いにはとても……」

言いかけてはっと口ごもる、レイ。そんな彼を、傍らの大男はきつい眼で睨みつけている。

どこか異質なものを見るような、険しい眼。誤魔化すには強烈すぎたようだ。今の技は。

「未登録の妖術使いなんだ。見なかったことにしてもらえると、有り難いな」

諦めたように告げる、レイ。シェイの目が、見開かれる。

魔道に疎い剣士ですら、知っている。

魔道師とは『魔道の塔』の厳しい試練に合格し、戒律によってその身を固められた者。それに挫折した者たちは、力を封じられるか『妖術使い』という名に一括される。

一般によく知られる妖術使いは、主に『占い師』『祈祷師』そして『精霊使い』など。

街の陰の部分で生計を立てているか、彼らのような賞金稼ぎの助けをするか。それ以外の未来はほぼ、あり得ない。

『魔道の塔』によって与えられた合金のサークレットは、忌み人の証と言っても過言ではない。

なればこそ、妖術使いは魔道師に憧れ、その反面憎む。

自分たちの上に胡座をかき、まるで当然のように自分たちを卑下する者として。

が、ごく稀に生まれながらに魔力を有し、実用に足る程に開花させながらも『妖術使い』となることを恐れ、その能力を隠している者も存在する。

未登録の妖術使い。見つければ、それこそ問答無用で裁かれても仕方がない者達であった。そう、『魔女狩り』という大義名分の上に成り立った、殺人によって。

「何、だと？」

レイの額には『妖術使い』を意味する合金のサークレットは、ない。また魔導師の金や銀のサークレットもない。それでいてあれ程の能力を有するという事は、確かに、未登録の妖術使いに外ならない。「隠していたのは悪かったと思っっている。しかし、表ざたになれば、ただでは済まないからだ」

これは、嘘である。たとえ表ざたになっても、レイ自身に何の咎めもないことは知っていた。

厳密に言うなら、レイは妖術使いですらない。

妖術使いの中では『占い師』に継いで二番目に数が多い、『精霊使い』。レイがその能力を有しているのは、彼が精霊を統べる者、精霊王の血族であるからだ。

『魔道の塔』であつても彼の血族、コルノス貴族フィルサーナ伯爵の一族を、裁くわけにはいかない。そんなことをすれば精霊の怒りが降りかかることは、必至であるからだ。

だが今、この話せば長い物語を説明している暇はレイにはない。あつたとしても、まだ仲間達に話す気にはなれない。

「納得してもらえたらなら、そろそろ次の行動に移りたい。風の結界も長くは持たないし、敵の方もこのまま黙っていてはくれないだろう」

決して納得していたわけではないシェイ・ノイユも、さすがにこれ以上は、食い下がれなかつた。余計なことに時間を食つたのは事実だ。

「お前の力はどれ程なんだ？ あてにしているのか？」

それでも今後のことを考えると、そこだけは確認しないわけにはいかない。

固く閉ざされた扉をこじ開け、何とか広間から脱出しつつ問いかけるシェイ・ノイユを、レイは困つたように見上げる。

「あてにされても困るな。切り札ぐらいのつもりでいてくれ」

「要する話が、役立たずってわけだな」

面白くもなさそうに告げるシェイ・ノイユに、

「まあ、そういうことだ」

思わず苦笑する、レイ。

全ての精霊の守護を受けた精霊王の末裔さえも、この男にかかつては役立たずなのだから、立場がない。

「で、どうする？ カルの援護に行くか？ それとも、このまま人質を採るか？」

「その暇は、ないようだが」

シェイ・ノイユの言葉に、前方に目を向ける。と、成程、確かに階段を何者かが駆け降りてくるようだ。彼らが無事、広間を脱出したことが発覚したのだろう。

剣を構え、前に立つ戦士の背後で、やはり剣を抜いて戦闘に備える、レイ。

待つ程もなく、一つの影が彼らの前に躍り出る。

唸りながら、必勝の問合いに入り込んだシェイ・ノイユの剣が、弧を描いた。

「シ、シェイ！」

戦士の剣が、敵の胸をなぎ払うかに見えた瞬間、その人物は叫んだ。

「お前、か！」

十分に勢いがついている善の剣をすんで止め、吐き捨てるように  
呟く、シェイ・ノイク。

赤い髪。そばかすの浮いた若々しい面。テス・ラインは、驚いたよ  
うに彼らを見つめていた。

7

地下水路は、惨憺たる状況だった。

最後の、最も大掛かりな仕掛けのせいで、崩れた天井が完全に水路  
を塞いでいる。どうやら砦の設計者は、万が一の場合はその仕掛けで  
この迷宮を潰すつもりだったようだ。多分迷宮の入り口付近にも同じ  
ような仕掛けがあるのでないかと、カル・ファンスは思う。

「これが、地下迷宮か」

彼が探していたのはこれだった。

いや、逆か。彼が敵を引きつけている間に、仲間に探して欲し  
かったのがこれだった。

「リヒト。この水路の出口は、ここだけですか？」

いきなりお鉢を回され、リヒトは少し焦ったように首を振った。

「いや、この地下水路は要人の緊急脱出口であると同時に、罪人の処  
刑場を兼ねていたと聞く。死刑が禁止されていた時代、罪人は迷宮に  
落とされ、唯一の希望を求めて出口を探すのだとか」

そして、ここにたどり着くまでの畏はそんな罪人を迷宮から出させ  
ない為のものなのだろう。死刑が禁止されていたとは言え 下手を  
すれば、死刑以上に惨い罰だったに違いない。

「だから、少なくとも砦に繋がる出口は、二つ以上はある。要人と罪  
人とを、同じ場所に落とすことはない筈だ」

もちろん、それらの説はレイスタの識者、ネイルの受け売りだ。

この出口は要人用だった可能性は、かなり高い。罪人用の出口にあるな仕掛けが必要だとは思えない。

「もうひとつは罪人用か。多分そっちだな」

「何が？」

カル・フランスの何げない呟きを聞き付け、鋭く突っ込むミアナに、「そっちに捕らわれてる可能性が高いと思わないか？ 村の女性は」なるほど、そう言うことが。

「シエイには人命救助最優先だって、何度も言ったんだけど」

「あー、それは多分無理でしょう」

相棒の性格を良く知るミアナがきっぱりと告げる。

彼は、ここに人助けの為に来たのではない。自分の借りを返すために来たのだ。最初にそう言っていた。

「君はどうする？」

「大丈夫、頭は冷えてるわよ。あたしじゃ、あの魔剣士には勝てない。だったら勝負の方に勝たないとね」

ミアナたちは賞金稼いだ。

そして、今度の仕事は魔剣士を倒すことでも、借りを返す事でもない。邪教の討伐。

「売られた喧嘩には、十倍の価値があるんだったね」

「ええ、十倍にして返してあげる。まずは、儀式をさせない事」

「すばらしい」

素直に賛嘆の意を唱える、カル・フランス。

ミアナの一番の長所は、常に前向きな所。やっとそれを取り戻したようだ。

別行動の三日の間に、様々なことがあったのだろう。

「あ、仕上げにあんたを殴った後にシエイを蹴るわよ」

そして、突っ込む事は忘れない。

カル・フランスは吹き出した。

「僕は地下牢を探す。目印が川辺にひっかかっていたってことは、その人は水辺に面した場所に捕らわれている可能性が高い」

「探せる？」

「ああ、地中の事には、誰より詳しい奴がいる」

告げたカル・フランスの笑みは、少し凄惨なものがあった。

「じゃあ、あたしはカルルのサポートにつくわ。リヒトはどうする？」

勿論、リヒトの目的は捕らわれた二人の救助だ。こっちに来るだろうとは解っていたが。

「一言良いかな？」

そんなミアナに、若き魔道師が口を挟んだ。

「さっきのは、君がが苦手なものを出すっていう意味なんだけどね」

「あ、あれを出すの？」

ミアナは基本的にぬめぬめ系が苦手だ。魚は大丈夫なのだが、蛇とか蜥蜴とか、その手の物は生理的に受け付けない。

カル・フランスが「出す」と言ってるのが、大地の蛇王とか言ったいそうな名前を持つ赤い蛇だということは容易に想像がついた。

「それが一番つつり早いからね」

ミアナは少し考えて、でもすぐに決心したようだ。

「リヒトは、ティータを助ける為に来たんだよね」

「勿論」と、金茶の髪ミアナの兄は頷く。

「ついでにその子を守るよね、リヒトなら」

その子って誰のことだよ、と、苦笑するカル・フランス。

「カル。リヒト。ティータとマーシィのこと、助けてくれるよね？」

「信じてもらっていいよ」

魔道師の言葉に、黒髪の女剣士は力強く頷いた。

「こっちは信じていいのかは解らないけど、渡しておくよ。これが最初にテス・ラインからもらった砦の見取り図だ」

ミアナはシェイのフォローに行ってもらわないといけない。レイではきつと手に余るだろうから。

今のミアナには、余裕がある。

仲間達を心配する余裕が。

だったら、大丈夫だ。

彼女はシェイを助けてくれる。その後で自分を殴ってシェイを蹴ればいい。

そう思った。

「気をつけて、ミアナ」

「そっちは宜しくね、リヒト」

兄妹が手を取り合い、やがて離れる。

ミアナの姿が見えなくなつてから、やおらにカル・フランスは小さな声で何かを呟いた。

魔道師の手の中には、いつからそこにいたのか、白い蜥蜴が乗っている。

ミアナは、彼を助ける人を残してくれた。

ならば、多分この砦の探索に一番有効で、一番危険な大地の蛇王の封印を解くまでもない。

普通の使い魔でも充分に彼の望みを果たしてくれるだろう。

「行け。行って主の望むものを見つけて来い」

白い蜥蜴は、すぐに駆けだした。

使い魔は、魔道師によつて召喚されるもの。

土に隠れ、空気に隠れて。魔道師の側にあるもの。

そして、その時になれば魔道師の作り出した現身をもつてその手足となつて働くもの。

使い魔は、魔道師の命令に忠実に従う。

いわば、魔道師の道具だ。

その言葉には、賛否両論あるが、カル・フランスにとって『使い魔』とはそういう物だった。使い魔は愛玩動物ではない。必要ならば、使い捨てる。そう在らなければならぬ。

普通に召喚される使い魔は、弱い。使い魔のダメージは主である術者に返るので、使い魔が危険な時にはいつでもその契約を解く覚悟がなければならぬ。使い捨てる、覚悟を。

だから、彼の使い魔の現身は常にシンプルだった。勿論、名前もつけない。

黄金色の小猿のアメリアーナ以外は。

彼が召喚したわけではないこの猿以外は。

「彼が、案内してくれます。ついて来てください」

金茶の髪の射手は、つられてそちらに足を進め、やがてぼつりと咳いた。

「どこから出したんだ？」

お約束通り「帽子からですよ」と笑う、カル・フランス。

崩れた水路を、二人は慎重に進み始めた。

「シエイ……」

押し殺したような声が、テス・ラインの口から漏れた。黒髪の剣士の射殺するような剣呑な視線を正面から受け、陽気な面は血の気を失い蒼白になっている。

知らず、あとじさった体が、壁に当たった。

全身を震わせ、テス・ラインはかつての相棒を見上げた。見開かれた眼から伺えるのは、恐怖？

「何を、驚いているんだ？」

低い声で、シエイ・ノイユが告げる。口元に浮かんだ凄惨な笑み、そして抜き放たれたままの剣が、殺意を持ってテス・ラインに迫る。

「俺たちが生きてるのが、そんなに不思議か？」

「そうじゃ、ない……」

赤髪の若者の弱々しい反論は、シエイ・ノイユには何の感慨をも、もたらさなかったようだ。

「打ち合わせとは違うな。一緒にいた連中はどうした？ 見捨てたのか？」

その言葉は、赤髪の青年にはかなり効いたらしい。左手が剣の柄にかり、眸に暗い炎が宿る。

「が、それは一瞬のことだった。」

「そうじゃない」

高ぶる感情を押さえるように拳を握り締め、テス・ラインはかぶりを振る。

「俺は」

「解るように、説明しろ。テス！」

一喝され、赤髪の若者は覚悟を決めたようだった。

怒りの形相をあらわにするシエイ・ノイユに正面から向き直り、妙な面差しで対峙する。

「俺は、決めたんだ。ナシユラを助けると」

訝しげに、シエイは首をかしげる。

「ナシユラは、死んだんじゃないのか？」

その問いに、赤髪のテスは答えなかった。

「俺は、『裏切者』だ。いつも、自分の命を天秤にかけてきた」

どちらにつけば、より生き延びる可能性が高いのか。その為には何

度だって、誰だって平気で裏切つて来た。

「前に聞いたよな、シエイ。俺が、前に所属していた部隊を裏切ったのかどうか。勿論裏切ったのさ。でなければ俺が生きてるわけがないだろ？」

テス・ラインは強運の持ち主だと、初めて仲間になった時に思った。彼は、どんな時も生きのびる。何を犠牲にしても、きつと生きる。そんな奴だと。

その頃「死神」と呼ばれていたシエイと組んでも、彼ならばきつとシエイを置いて死なないと思った。

そう、彼が本当に『裏切者』であったことは知っていた。きつと、自分を裏切つても生き残る。この男はそんな男だ。

それでもいいかと思っていたのだ。

どっちが先に死ぬのか、賭けてやるうかと。それほどに荒んでいた時期が、シエイにはあった。

だが、テス・ラインは彼を裏切ること一度もなかった。テスの強運とシエイの悪運。それらは、彼らを絶体絶命の窮地に追いやることになかったから。

そんな彼らが出会ったのがナシユラという名の精霊使い。自分のことを『疫病神』だと、言っていた。

（あんなたちなら、受けてもらえると思ってここまで来たのよ。疫病神の依頼を）

女は、そう語った。

引き受けた仕事は、護衛。どこかに閉じこめられている狂った精霊を鎮めるのが目的だと言っていた。

だが、『疫病神』は本当に疫病神だった。

山を行けば盗賊に襲われる。川を渡ろうとすれば、橋が落ちている。町にたどりつけば、宿が空いてない。

呪われてるんじゃないのか、この仕事は。本気でそう思った。

（だったら、お前は抜けるよ。俺らはちゃんと生きて帰って来るから）

テスに笑って言われ、シエイは本気で抜けた。

違約金として前払い金の倍を取られてもいいと。彼の悪運がそう告げたのかも知れない。

不思議なことに、シエイが抜けてから彼らは目的を達した。

疫病神なのはナシユラじゃなくて俺かと、そう思っていた。

「俺は死なない。強運の持ち主なんだと思っていた。その強運も、何もかもをかけて、俺はナシユラを守りたかった」

それは、真実。誰よりも愛していた、ナシユラという、女。

「あいつは、生きている。そう言ってもいいのなら、な」

テスは顔を上げた。その口元には皮肉めいた笑みが浮かんでいる。

「畏だと、俺が裏切ったのだと気づいたのなら、何故逃げてくれなかったんだ？ シエイ」

声が響いたのは、その時だ。

「話が守護精霊 猛き者、カッソスのセアラよ。力を示せ！」

先ほどの祭壇で聞こえたのと同じ声。若い女の声だ。

炎の塊が、背後から彼らを襲う。

「ファルルーンよ、我らを守り賜え！」

レイの使う風の魔法がそれを遮る。

炎が消えた後には、一人の女の姿があった。

短い金髪を肩口で切りそろえた、きつい面差しをした女。彼女は自分を

『疫病神』と呼んでいた。

「遅いじゃないの、テス」

炎の精霊使い、ナシユラは妖艶な笑みを浮かべてそこに立っている。

「あたしの為なら、命なんか惜しくない。誰だって裏切れる。そう言うてくれたのに。ラ・ナ・レーンだって裏切れるって言ったのに」

その、光の加減によって金色に輝く眼には狂気の色が見える。

「お前、違うな」

テス・ラインを牽制しつつシエイが告げる。

「お前、前のナシユラじゃない」

自分を『疫病神』と呼んでいた女は、こんな眼はしていなかった。

「明るい、どちらかといえば可愛い女だった。その女にテスは惚れたのではないのか？」

彼らに何があったのか、別に興味は無かったが。

「お前の望みは何だ？ ナシユラ」

聞くべきは、何故彼らが自分たちの命を狙ったのかということ。

自分たちが、今夜この皆で行われる儀式に招かれたことは、解っている。儀式の生け贄として。聞きたいのは、それがなぜ自分たちだったのかということだ。

「あたしに望みなんか無い。望んでいるのは神よ」

ナシユラは笑い、再び炎を放つ。同時にテスが動いた。シエイに向かって剣を突き出す。

シエイは初めて、背後をレイに任せた。

精霊使いの事は精霊使いに任せておいても大丈夫だろう。テスの剣を受け、返す。

「シエイ、俺は女を追う」

レイの声が背後から投げかけられ、遠ざかる足音。

「どうやらナシユラは炎を彼らに放った後、その場を離れたようだ。」

それを防いだレイが後を追った。

「ならば、こちらも早く決着をつけないとな。」

「本気で来いよ、『裏切者』」

黒髪の剣士は、酷薄めいた笑みを浮かべた。

「剣をかまえるテス・ラインの眼は真剣だ。彼は持てる全ての力をこの一撃にかけて来るだろう。」

仕掛けたのは、どちらが先だったのか。

「剣戟の音は、一度。」

「それに続く、金属が転がるような音。」

「赤毛の傭兵の剣が、折れたのだ。」

「やはり、お前には勝てないか」

テス・ラインは弱々しく笑った。そのまま、がくりと膝をつく。剣を失い、戦う意欲も無くしたのだろつ。

「あの時、ナシユラは 狂った精霊を鎮めようとして、その身に取  
り込んだんだ。いや……」

逆に取り込まれたのだと、後で知る。

「そんなあいつを、俺は助けてやるのが出来なかった」

顔を上げたテス・ラインに浮かんでいたのは、救いを求める目。

「お前の手で、終わらせてくれ。シェイ」

罪を犯した自分を殺せと、そして愛する女を殺してくれと、そう願  
っている。

「馬鹿野郎！ てめえの女の始末は、てめえでつけやがれっ！」

シェイの一喝に、雷にでも撃たれたように、テス・ラインは身体を  
竦ませた。シェイを見あげる目に、戸惑いの色が浮かぶ。

「最後まで、面倒みてやれよ。大切な相棒なんだろつ？」

告げるシェイの脳裏に浮かぶのは、黒髪の少女の姿。

いつも背中を任せて来た。前向きで短気でうるさくて、そして愛お  
しい。大切な相棒の姿だ。

ようやくと立ち上がった元相棒の傭兵は、初めてシェイに頭を下げ  
た。そして、駆け出す。

「あたしが、見届けてあげる」

やや離れた場所からかけられた声に、シェイの口元が自然に綻んだ。

それが誰なのか、振り返らなくても解ったので。

「あなたは魔剣士を捜しなさい」

黒髪の女剣士は、普段通りにそこに居た。

「生け贄の女たちは、カルが探している。あたしはテスを追っわ」

だから、あなたは心置きなくあの魔剣士と戦いなさい。まっすぐに  
彼を見つめる黒い瞳が、そう語っている。

やがてシェイに背を向け、軽い足取りでテスを追う女剣士。

「……勝手にしろ」

その後ろ姿に、いつものように無然と答えるシェイ。

「勝手にするわ」

ミアナは、振り返って笑った。

この時、シェイはテス・ラインを殺さなかった。それが後になって  
とんでもない波紋を呼び起こすことになる。

もう、夜が来たのだろうか？

アクル村の娘、ティータはそんなことを考えていた。

今日が『闇の日』であることは知っている。炎の儀式が行われる日だと、あのダークブロンドの髪の色は言っていた。

助けは来なかった。

二度と帰れないのだろうか。あの村に。二度と会えないのだろうか。あの人に。

そう思うと、悲しくなった。

大好きだった、明るい髪の色。

手先が器用で、昔はよく細工物をこしらえていた。ヤドリギで編んだ髪飾りを貰ったのは、収穫祭の時。

子供達の舞台「精霊のおくりもの」。春の日の風の役を演じた彼女の為に作ってくれた。すごく嬉しかったのに、ちゃんとお礼を言えなかった。

舞台の最後に神に感謝し貢ぎ物を捧げる。その役割の衣装を着た彼が、ときどきするほど素敵だったので。

「あんたも、けっこう似合ってるね」

それぐらいの言葉を言ってお茶を濁した記憶だけが残っている。

彼はきつと知らない。そんなに小さな頃から、好きだった。

気づいたのは、従兄弟のデュートぐらいだっただろう。それほどに

秘め隠しながらも、ずっとずっと好きだった。

きつと彼への思いが一番強いのは、自分だと思っている。

いや

そつと、彼女の膝で眠っている幼女の髪に触れる。

この子とは、争えるかな？

物心もつかない時から、彼一筋だものね。

そう思うと、今度は自然に笑みがこぼれてくる。

マーシィは眠っている。こんな時なのに眠れるなんて、さすがは歴戦の勇者の娘。肝が据わっている。

いや、子供なんてそんなもんかな？

その黒い髪を撫でていると、少し勇気が湧いてくる。

その時だった。

扉の向こうに、人の気配を感じた。

きつと、彼女たちを炎の儀式とやらに連れて行く者なのだろう。

ティータは、以前に男が置いていった短剣を手に取った。どうせ死ぬなら、せめて、一太刀ぐらい浴びせないと気が済まない。

返り討ちにあってもかまわない。わけのわからない儀式などに使われるよりは、何倍も良い。そう思うと短剣を持つ手に力が入る。

ティータの目の前で、ゆっくりと扉が開いた。

まず、目に入ったのはランタンを持つ手。短剣を構え、利き足に力を込めてその時に備える。

「ティータ？」

その声に、ティータは動きを止めた。

それは、彼女が大好きな声だったので。

髪の色から始まり、顔も声もちょっと気弱な所も考え方も……そして、今はその弓の腕前までも好きだ。

「リヒト……？」

ランタンの明かりに映し出されたのが、大好きなその人だったので。村一番の器量良しで、村で一番気が強いと噂される女は、婚約者の胸に飛び込んだ。

「遅くなってごめん」

ぎこちなく、その肩を抱くりヒトに、

「ほんつとくに、遅すぎ！」

言い返す、ティータ。

顔は上げない。その優しい目を見ると、泣きそうだから。

「悪いけど、ゆっくりとはしてられないよ」

続いて入って来た野暮な人影が、眠っているマーシィを抱き上げる。

それに頷き、リヒトはティータの手を引いた。

「多分、迎えが来るから」

そいつらは、始末する。

リヒトの目が決意しているようなので。

先に手を放したのは、ティータの方だった。リヒトは射手だ。人の手を取っていても、弓は持てない。

ティータの意図を悟ってくれたらしい。リヒトはランタンを彼女に

渡し、弓矢をいつでも使えるように準備する。

待つことしばし。案の定、彼女達を迎えに来たであろう者がやってきた。人数は二人。リヒトは三本の矢を同時に弓につがえる。

生け贄が逃げたことを知り、飛び出して来た男を撃つ。一本は一人の頭を。二本はもう一人の首と胸を、見事に射抜いていた。

「お見事」

幼女を抱いた小柄な影が賛嘆を口にした。先に言われて、またしてもティータは自分の気持ちを相手に投げかけることに失敗した。

松明とティータの手にしたランタンに浮かび出されるのは明るい色の長い髪の少年。額にサークレットをはめているので、魔道師か妖術使い。それぐらいの知識はティータにもある。

「これで、少しは時間が稼げるか？」

リヒトの問いに、彼は即座に頷いた。

「彼女たちを逃がす時間は稼げたかな。悪いけど、僕がつきあえるのはここまでだ」

やっと目を覚ましたマーシィをリヒトに渡し、その少年は一度目を閉じた。

「精霊がかなり騒いでいる。仲間が心配だ」

「解った。じゃあ……」

「待つて」

彼らのやりとりを聞いて、この少年はただ彼女たちを助けに来た訳では無いことを知る。

そして、リヒトの後ろ髪を引かれるような表情も気になる。

「一体何があつたの？ その人は誰？」

「魔道師のカル・ファンズ。ミアナの仲間だ。彼が君を見つけてくれたんだ」

正確には彼の使い魔が、だが。勿論そんなことはティータには解る筈もない。

それ以上に聞き流せない名前を聞いた。

「ミアナが来てるの？」

ミアナ。リヒトの義理の妹。

あの子には、負けられないなという気持ちが心のどこかにある。

「わかった。二人で行って。私とマーシィはどこかで隠れているわ」

ティータの言葉に、二人の若者は驚いたようだ。

「無茶を言う」

カル・ファンズと呼ばれた少年が、呆れたように告げる。

子供のくせに偉そうなのは魔道師だからなのだろうか？

「解ってるはずよ。レイスタの女は、戦士の足手まといにはならな

い」

彼らが仲間を救いに行かなければならないなら、自分達はここで待

つ。それぐらいの勇氣は、自分にだってある。

「出来るわけがないだろう、そんなこと」

リヒトが、困ったように顔を押しさえている。彼は、ティータが一度

言い出した事にはなかなか引かない事を知っているから。

「じゃあ、こうしよう」

代わりに、即決したのはカル・ファンズだった。

「このまま最短距離を通って彼女たちを外に逃がす」

言う間にも、彼は既に足を進めている。

「本当に、ぐずぐずはしてられないんだ。だからといって貴方は、

彼女たちをここに残せる人じゃない」

「しかし、カル・ファンズ……」

「解ったわ」

リヒトからマーシィを受け取り、ティータはその後を追う。

心のどこかで、苛立っている自分をティータは意識した。一言で言

うならば、「この子なんなの？」である。

ミアナの仲間だと言っていた。そんな彼がどうして、リヒトの凶星

を言い当てるんだろう？ いや、実際に彼の優しい性格は解りやす

ぎるのだが。

すっかり前に出過ぎたティータが、立ち止まった魔道師の背にぶつ

かりかける。

振り返った魔道師は困ったように微笑みながら、その肩に一匹の小

さな猿を乗せた。

「信じて下さい」

本当に、何なのだろう。この子。

子供のくせになんて深い目で人を見るんだろう。

ティータの戸惑いを余所に、腕に抱いたマーシィの方は小猿の愛ら

しい姿にご満悦のようだ。猿と幼女の仕草に、ティータの口元にも自然に笑みが浮かび上がる。

その間に数歩下がったカル・フランスの囁きが、うっかり耳に入るまでは。

「ところでレイスタの女性は、みんなああいう性格なのか？」

その「みんな」が誰と誰を指しているのか、すぐに解ったから。

村娘ティータの、魔道師カル・フランスへの第一印象は、最悪なものになった。

儀式の場は、かつては集会場だったと思われる場所だった。

先刻の祭壇とは比べものにならない程の大きな広間。天井は三階分が吹き抜けになっている。

その二階部分の踊り場に潜むレイの前で、儀式の準備は着々と行われていた。

そこに、その一報が飛び込んで来た。

生け贄の娘達が姿を消した。そして、そこには信者の死体が残されていた。

それを聞いても、ナシユラは動揺していなかった。

先にナシユラを追ったレイがたどり着いたのは、集会場のような場所だった。中には数百と思われる信者が詰めかけている。

儀式は既に全ての準備を終え、後は炎の神の生け贄を待つだけだったのだ。

今のレイには、誰が敵で味方に誰が加わったのかも解らない状態だ。生け贄の娘たちが、彼らの仲間によって助けられたという報告だけが、せめてものの救いだった。

ナシユラは二度、失敗している。ならば儀式の成功はないのか。

いや、相手は狂信者だ。いざとなれば何を生け贄にするか解ったものではない。

集う人数の多さに、実は辟易している。

どうりで、彼が何事もなくこまでたどり着けたわけだ。

狂信者たちは、侵入者のことを特に気にしていない。それだけ、この儀式に集中している。

良くない傾向なのは、確かだ。

最初のカル・フランスとテス・ラインの作戦では、儀式が始まったら二方向から攻め、ゾーラ教が邪教であるという証拠を手に入れる。

その為には、可能な限りリーダー格の者を殺さずに捕らえなければならぬ。

これで、作戦成功。というものだった。

二日前、生け贄の女性がいることを知らされた時に、更にそこに人命救助最優先という項目が加わった。

それらの作戦は瓦解している。

レイは今、完全に孤立している。仲間は、彼を含めて三人 いや、多分四人。それぞれがどう動くかで、この後の展開がかなり変わる。

もつとも、出来ることが限られているのだから、今自分に出来るこ

とをしないのだが。

集中すれば、精霊の声が聞こえる。

ここは危ない。何かが起こる。良くないことが。

精霊は人間の数倍も空気の変化に敏感だ。それをダイレクトに受け取ったレイには、自然と焦りが生じる。

そこに、テス・ラインが姿を現した。

どういうことだ？ と、言うのがレイの素直な感想だ。

テスは、シエイが相手をしていた筈。まさか……。

いや、彼に限ってあの裏切者に遅れを取るわけがない。それだけは確かな筈だ。

成り行きを凝視するレイの脚に、なにかが当たった。

音の先を辿ると、小さな石が転がっている。

どこから？ あっちか？

向き直ると、そこには戦線離脱した筈の女剣士が口元にひとさし指を当てて彼を見ていた。

なるほど、そういう事か。

レイはやつと笑顔を見せた。

テスの事は、合流した相棒に託したのか、と。

「シエイは？」

女剣士の元に近づき、ひそめた声で告げる。

「魔剣士を倒しに行ったわ。カルは生け贄の救出に行った。あたしたちは、儀式見届け組」

ちなみに、見せてもらったからね。あんたの秘密。

ミアナが、にっと笑つ。

「決定事項を伝えるわ。事が終わったら、カルを殴ってシエイを蹴つて、あんたを踏む」

それは、頼もしい。と、レイもまた笑った。

「テスが止められなかったら、あたしが出る。フォローよろしく」

「期待に添えられるように、全力を尽くす」

ミアナは、すっかりいつもの女剣士の顔だ。彼女の中で吹っ切れる何かがあったのだろう。

ならば、こつちも吹っ切れる。

未登録の精霊使い。本業薬師。それを彼らが認めてくれたのだから、それでいい。

様子を伺う二人と、周囲を取り巻く信者の無感動な視線の中で、やがてテス・ラインは告げた。

「ナシユラ。お前も傭兵だったなら、引き時をわきまえろ。儀式は

失敗だ」

ナシユラもまた無感動な一瞥を彼に向ける。

「裏切者テス・ライン。どうしてそんなことが言えるの？」

抑揚のない声で、告げる。

「奥の手はは、一つとは限らない。それが使えなくなった時の為に、少なくとも二つ以上は確保しておけ。私に教えてくれたのは、あなただったわよね。テス・ライン」

その手には、いつの間にか短剣が握られている。

まさか、と。レイは思った。きっとミアナも同じ事を考えている筈だ。彼女が自分の白い手首に、その切っ先を向けたのだから。

「これが、あたしの最後の切り札」

白い手首から、血があふれ出す。

「我が血に封じられし者　我が守護精霊、カッソスのセアラよ。汝の封印を今、解き放つ……」

血の封印。

ミアナやレイも、知っている。

主に、妖魔を役とする為に使われる技だ。妖魔を術者の血の中に封じ、必要な時に解放する。術者が死ぬ瞬間までその封印は解けない。

その代わり封印したままで術者が死ぬことになれば、その身体は封じていた妖魔らの餌になる。

極めて単純かつ危険な封印であった。

一番危ないのは、妖魔を解放した後。

妖魔を制御する力がなければ、妖魔は術者に襲いかかり、その力を得る。

「ナシユラ！」

テスが叫ぶ。床に落ちた紅の血の中からゆらりと、何かが立ち上がった。

「カッソスのセアラ。あたしが、あなたに望むことはひとつだけ。あなたに出来ることも、ひとつだけ」

駄目だ。

二人は同時に思った。だから動いたのも同時だった。

ミアナは女に向かって駆けだした。レイは、呼びかける。

「ファルルーンよ！　風の加護を！」

風の加護　風の結果は、その立ち揺らぐ何かをわずかの間だけ足

止めする。

その間に、女剣士が術者を切ってくれる。

レイは、そう思っていた。

だが。

「全てを滅ぼせ」

女がその一言を言い終えるのが、わずかに早かった。

たちまちに燃え上がる炎の柱。

ミアナの小柄な身体が正面から炎に包まれた。

ミアナは、死んだと思っただろうか？　若く美しい体に、惨い火傷

の傷を残すことになるかと嘆いただろうか？

それ以前に、彼女を取り巻く炎の守りに気づいてくれただろうか？

問一髪。

レイが召喚した別の炎が、彼女を守ったのだ。

「助かったわ、レイ」

大きく息をついた後、破顔して余裕を見せるミアナ。

しかし、炎に剣は効かない。

術者を殺せば何とかかなるかなと、考えたミアナがちらりとナシユラ

の様子を伺う。

ナシユラは手首を押さえ、呆然と立ちつくしていた。その様子からは先刻までの冷酷な面差しはまるでない。

精霊を解放したおかげで、やっと彼女は自分を取り戻すことが出来たのだと知る。

「いたい」

ナシユラは呟いた。

「いたいよ、テス」

救いを求めるように、あえぐ、ナシユラ。

痛いのか居たいなのか。それは解らない。

どちらにしても、悲しかった。術者を殺しても、あの化け物はどうにもならないのだということも解った。

だったら、ミアナの出番はない。

ミアナが剣を引くのとほぼ同時に、テス・ラインが、ナシユラの手から短剣を取った。

「ごめん。ナシユラ」

炎の精霊を鎮めようとして、逆に取り込まれてしまったナシユラは、ずっと炎の檻の中にいた。そんな彼女を、一人のゾーラ教徒が利用した。

彼女を唆し、彼女の中に住む狂える精霊を利用しようとしたのだ。

この、炎の儀式の為に。

愛する女を守る為に、テスはシェイたちを裏切った。

「ごめん」

テスの手に握られた短剣の意味を、精霊使いの女は知っている。

「よかった」

彼女は、そう告げた。

「あだし、最後に謝れる」

テスの手の短剣が、その胸に吸い込まれる。その瞬間に、ナシユラは呟いたのだ。

「疫病神で、ごめんね……」

その騎影が皆にたどり着いた時には、既に日は暮れ果て。長い新月の夜が始まっていた。

アクルルの戦士、マイヤ。

無くした右足の代わりに義足で、馬を操る。それだけで困難な筈だ。

だが、彼は先導する筈の族長の甥、デュートを追い越し皆にたどりついた。

そこには、可愛い娘と可愛い妹と可愛い義弟とその婚約者がいる。

どいつもこいつも、どうしてそんな所に。

と、激昂したのは昨日の事だった。

リヒトとミアナを信じて、待ってみよう。

そう言った族長の甥の胸ぐらを掴み上げたものの、殴らなかつただけ彼は常識的だったのだろう。

ミアナの仲間も別行動だが一緒だと、デュートが語ったので。

その言葉の意味はよく解らないが、あの男も一緒に居るはずだ。

ならば、信じてみよう。

だから、夜になるまで待った。

しかし、娘も妹も義弟もその婚約者も帰らない。

彼を止められる人間は、誰もいなかった。

皆には、不穏な空気が取り巻いていた。

大事の前の緊張感のようなもの。マイヤには久し振りの、おののきのようなものが全身に漲る。

無意識に、腰の剣に触れると何故か少し落ち着いた。

そう。

取り戻せ。その感覚を。

まだ、錆び付いてはいない筈。かつて、「黄昏の戦士」と呼ばれていた頃の自分。

死なない為に、剣を振るう。そして、生きるという事を体で実感することが出来た。

青臭く、愚かで。強かった。

その、強さだけを思い出せ。守るべき者と共に、生きる為に。

ゆっくりと、皆に向けて馬を進める。

そこに、その者は居た。

「お前なのか？ イシル」

「待っていた。マイヤ」

暗い金髪の魔剣士は、蒼の瞳をレイスタの戦士に向けた。

「シェイ」

魔剣士を探していたシェイは、背後からの声に振り返る。

「どこから湧いた？」

呆れたような声が、自然に出た。

「酷い言われようだな。君がする筈だった事を成し遂げたつもりなんだけど」

久し振りに聞く彼の声に、魔道師カル・ファンズは少し慚然と答える。

見れば、彼の背後には一人の女性と一人の子供。そして金茶の髪の毛がいます。

リヒトか、と、シェイは口の中で呟いた。

昔、マイヤの家で何度か会った事がある。多分、ミアナを連れて来たのはこいつか。

「気づいているか？ 空気がひどく重い。深い闇が迫っている」

「だったら、お前は自分がするべきことをするんだな」

結局の所、邪教徒の儀式とやらを止めることが出来るのは、自分達の中ではこの魔道師だけのような気がする。だから、すっかり任せたりもりになっていたのだ。

まさか、背後に湧いているとは思わない。

「先に彼女らを逃がしたい。でもここを行くと、多分」

一方向を指さす、カル・ファンズ。

「魔剣士と鉢合わせる」

はじかれるように、シェイがそちらに向き直る。

「何故解る？」

「独特の気を持つてるからね、彼は」

シェイが、魔道師の指さした方向に足を向けた時。

一騎の馬が、彼らの前に飛び込んで来た。黒髪の青年がひらりと彼らの前に降り立つ。

「デュート？」

「リヒト、間に合ったんだな」

リヒトの、そしてティータの手を取り嬉しそうに笑ったのは、リヒトが昨日森の中で別れた族長の甥だった。

「どうしてお前が？」

「マイヤに連れて来られた。そつだ、あの時の戦士が居る。俺は

先に行かってマイヤが……」

デュートの言葉が終わらぬ内に駆け出そうとするシェイの前に、魔道師が立ちはだかる。

「本当は、これは言いつもりは無かったんだけど」

苛立たしげに彼を睨み付ける戦士の目を、まともに受ける。彼がこつという態度を取る時は、たいてい自分を不機嫌にする事を口にする時だと、シェイは知っていた。

「反魂術と呼ばれるものを知っているか？」

「ばけもんを呼び出す魔法だろう？」

邪教の死霊術師が使うものだ。その魔法によって召喚された死霊は

普通の武器が効かないので、一度えらい目にあつたことがある。

「死霊を呼び戻すこともある。そして、死者に命を吹き込むことも」

ぷくりと、シェイの眉が寄せられる。

「覚えておいてくれ。それはその者の天命を狂わせ、転生を損なわせ、魂に傷をつける邪法だ」

「救いを求めているなら、救って欲しい」と、魔道師は続ける。

こいつは、最初からその可能性を疑っていたのか。初めて、そう気づく。秘密主義にも限度があると言いたい所だが、その時間も惜しい。

だから。

「カル」

シェイは、軽く口元を歪めた。

「前にも言った。俺をあまり嘗めるな」

「安心したよ」

その時と同じ台詞を魔道師は返して来る。

「俺も、そつちのことは心配していない」

言つが早いから、黒髪の剣士は駆け出した。彼の戦場へ向けて。

「あなたは、彼女たちをお願いします」

デュートにそう告げると、魔道師もまた別の方向に駆け出す。それに続く、リヒト。

「デュート、二人を頼む」

義兄ではなく、義妹のいる場所を自然に選んでいた。

「だから、勝手に決めるなっ！」

デュートの叫んでいる間に、ティータは一度マーシィを彼に渡し、馬にまたがる。なされるがままのデュートから改めてマーシィを受けとり、

「あんたはどつするの？ デュート？」

馬上から、問いかける。

「俺？」

「私たちは、戻るわ。生きて村にたどり着いて、戦士達を迎えるのが女の役目ですもの」

負けていられない。

リヒトは、妹の力になるために再び戦場に赴いたのだ。争いを好まない、あのリヒトが。

これは負けてられないなど、彼女は思った。ミアナにはミアナの、ティータにはティータの戦いがある。

思い切り、鎧を蹴る。

数歩、その馬を追いかけ。追いつけないことを悟ると、デュートは叫んだ。

「どいつも、こいつも！」

女は追わない。戻ればマイヤとあの戦士。そっちにはシェイが向かった。

リヒト達が向かったのは、得体の知れない儀式。

親族の危機に理性が飛んでる男とも、信仰に対して不感症な友人と

も、こ一緒したくなかった。「あいつら、絶対に今日が新月だってこと忘れてるもんな」と、ぼやく。

助けに来た女は、彼の馬に乗って逃げた。だつたら この辺りで、様子見するか。

彼の最大の勇気を振り絞った行動が事件をどつ左右するのが、それは結果を見なければ解らない。

闇の中で対峙する、二人。

かつて、「黄昏の戦士」と呼ばれた二人。

よもやと思つたシェイだったが、その姿を初めて目にして。

十年前と同じ姿のイシルと、四年前に別れた痛々しい姿から、すっかり立ち直つたように見えるマイヤを前にして。

不思議な感慨を覚えた。

二人とも、シェイにとっては「目の前でいなくなった者」なのだ。今、彼の前にその二人が立っている。

「黄昏の戦士」イシルとマイヤが。

「イシル、なのか？」

剣の柄を握つた体制で、シェイが尋ねる。

「見た通りだ」

斜め後ろからの声に、暗い金髪の魔剣士は無感動に告げる。

そして、ちらりと視線をシェイに向け、笑った。

妖艶にも見える、笑みだつた。

「久し振りだな、小僧」

その口調も十年前と変わらないので、ますますシエイは戸惑った。

「お前は死んだ筈だ。ダートが殺された時。お前は一人でゾーラ教徒の中に飛び込んで行った。仇を撃つために」

いや、違うか。

今、実際にその頃のイシルと同じ姿を見て、その時の記憶が正確に蘇る。

彼は、ダートの形見を取りに行ったのだ。

(ダートをひとりにしておけない)

(あいつの形見を届けたいんだ。あいつの代わりに)

(相棒だからな)

魔剣士イシルはそう言って、笑った。

ダートの仇と共に討ち死ぬことなど、考えてもいないような笑みだったから。皮肉めいた言葉ばかり吐き捨てる魔剣士が、彼に初めて見せた屈託のない笑みだったから。逆にシエイは思ったのだ。

この男と会う事は、二度とないのだろう、と。

「生きたかったのだろうか？ それ程に」

ダートの名を口に出した途端に、魔剣士に変化が現れた。

皮肉めいたしゃべり方も、氷を思わせる蒼の眼も、どこか虚ろに見える。

「俺は現にここにいる。生きています。ダートが死んだのに俺が生きている。だからこんなに虚ろなのか？ ダートをひとりにして、俺

は生きていますから」

違う。

それは、イシルの言葉ではない。

彼らの知るイシルの言葉では、あり得ない。

(ダートをひとりにしておけない)

あの時のイシルの言葉を、逆に取った。それが、呪いか？

「この空虚は、お前を切れば埋まるのか？ それともお前をか？ マ

イヤ」

マイヤは、先刻からずっと険しい顔でそれらの様子を睨み付けている。

「反魂術」

先刻、カル・フランスが告げたその術の名を口にする。魔剣士が、

はじかれたようにシエイを見た。

「死者に魂を吹き込み。その者の天命を狂わせる。俺の知り合いがそう言っていたぜ、イシル」

マイヤの目が、すうっと細められる。

それは、嫌悪感。死んだ筈の仲間が、その術によってかりそめの生を受け、心の空虚を埋める為に彼を切るとイシルは言った。

「陥ちたものだな、イシル」

静かに告げるマイヤの声の中には、明らかに憤りが感じられる。

「それほどに、生に執着するのか？ そんな、無様な姿を俺の前に示してまで」

「お前が、それを言うのか？ マイヤ」

イシルの言うのは、彼の義足のことだ。

失われた、マイヤ右足。

以前の彼ならば確かに、不具の身体を持って生きていることは望まなかった。

更なる強敵を求めて、レイスタを出たばかりの彼ならば。戦うことのみ、自分の存在意義を感じていた日の彼ならば。

「生きていたら、人は変わるんだぜ、イシル」

言う間に、マイヤは剣を抜く。

「手を出すな、シエイ」

「そうは、行くか」

その手を押さえ、シエイは笑った。

「あなたは間違ってる。でも、今のあなたは前みたいに戦えない。だったらあなたの代わりに戦うのが、相棒だろう？」

それを教えてくれたのは、今、目の前にいる魔剣士。

(思い出させてやるよ)

救いを求めているようなら救ってくれと、魔道師は言った。

でも、この魔剣士を救ってやる方法なんか解らない。だから 思い出させてやる。

彼の、本当の言葉を。

シエイは迷わずイシルに剣を向けた。

魔道師が辿りついたそこは、阿鼻叫喚の坩堝のようだった。

燃えさかる炎の巨人と、それに祈りを捧げる信者の姿。

「狂った精霊か」

それにしても、なんとという熱だ。しかも信者の祈りに応えるように、その炎は徐々に大きくなっている。吹き抜けになっているこの祭事場の、もうひとつ上の天井にすら届くほどの巨体だ。

必死になって精霊を召喚しているレイと、それを守っているミアナとテス・ラインの姿を見つけ、カル・ファンスはそちらに向かう。

「どうだ？ レイ」

話す間にも、胸を熱が焼く。

「だめだ。信者の祈りが強すぎる。俺の炎では太刀打ちできない」

だからこそ、彼らに立ち向かう者は少ない。皆、自分の祈りに没頭している。そう、この剣士にも精霊使いにも何も出来ないことを、信者達は知っていた。

狂った精霊は、精霊使いの力を持ってしても精霊界に帰れない。その力を使い果たし、消滅するのみ。

しかし、それを待っているわけにはいかない。この儀式を中断させない限り、炎はどこまでも燃えさかる。

「仕方ない。ここで封印する」

「やめてくれ」

きっぱりと告げたのは、レイ。

驚いたように、カル・ファンスは青年の蒼の瞳をのぞき込む。彼の

瞳には、怒りの色があった。

「精霊は、魔道師の道具じゃない」

精霊は魔道師によって召喚され、長く使役されることがある。そうして、狂うのだ。

人に支配され、狂うのだ。

それをナシユラは鎮めようとした。逆にそんなナシユラを利用したのはゾーラ教の魔道師だと、テス・ラインは語った。

「他に手があるのか？」

「精霊支配を、行う」

炎の精霊使いのナシユラがやるうとして、出来なかった事だ。だが、レイも炎の精霊を守護に持つ。

「俺の支配の元でゆっくりと癒す。そうすれば彼はいつか精霊界に帰れる」

「出来ると、言い切れるのか？」

現に、ナシユラはそれに失敗している。精霊を支配するつもりで、逆に取り込まれた。今度は 失敗は許されない。

「それが出来ないようでは、あの名は名乗れない」

精霊王の末裔を意味する、彼の本名。

レディスラン・フィルサーナという名前のことを、この銀髪の精霊使いは言っているのだ。

「解った。じゃあ、これは返しておく」

レイの決意の強さを知ったカル・ファンスは、預かっていた精霊使

いの守護石を取り出した。

守る力は、きつと必要だ。

「僕らは、信者の力を押さえなければいいんだね？」

「頼む」

そういえば、と。気になっていたことを付け加えた。

「下の祭壇にいた奴は始末してくれたんだな」

数時間前に、レイとシェイを襲ったあの祭壇の炎。先刻まで感じられたあの嫌な感じがいつの間にか消えている。

「まあ、結果的には？」

その問いには、何故かはつきり答ええない魔道師に不審を覚えつつ。

レイは集中に入る。今は時間がいくらあっても足りない。

彼の手に収まった守護石が、虹色に輝き始めた。

「リヒト、レイを守っていただけですか？」

必須条件は、レイの集中を途切らせないこと。その為には、誰かがその身を守る必要がある。

「ミアナは、出来れば僕を」

「どうするの？」

「レイがあいつを鎮める。だから僕は、別のやり方で信者の力を押さえる」

「俺も、やる」

いつの間にか、彼らの側に来ていたテス・ラインが告げた。

「あんたらは、ナシユラができなかったことを、やるうとしてるんだ

るう？ だったら俺はあんたらを守る」

そばかすの浮いた愛嬌ある面には、決意の色が宿っていた。信じられる。彼はもう裏切らないだろう。

「悪いんだけど、下には決して降りないでくれ。味方が巻き込まれるのが一番痛い」

戦士達が彼らを守るように円陣を組むと、カル・ファンズはおもむろに印を結んだ。

両手の人差し指と中指と薬指で三角形を作り、それを回転させる。

それぞれの頂点が、天と地と、そして自分を向くように。

「ラ・ナ・レーンの御名において」

よく通る声が、告げた。

「大気よ、眠りを誘う雲となれ」

大気に満ちるラ・ナ・レーンの霊力が、それに呼応する。

彼を中心に立ち上った黄金色のオーラが、広間を満たす。光の粒子は一人、また一人と信者達にまわりつき、その粒子にまわりつかれた者はそのまま意識を失う。

「すごいな」

リヒトが呟く。

こんな戦い方があるのか。味方に犠牲を出さずに、敵だけを信者だけを眠らせる。

「やるときはやるのよ、うちのリーダーは」

少し誇らしげに、ミアナは笑った。

小柄で童顔。いつも笑っている少年のようなカル・ファンズからは想像が出来ない力の奔流がそこにあった。

精霊を押さえるのが、レイの役目。

そして、信者の力を押さえるのが彼の役目。

仲間を眠らせる者がある。慌てて隣の者を起こそうとした信者もまた、金色の粒子の中に意識を失う。それを行っている魔道師の存在に気づいた者たちが彼に剣を向けるのを、三人の戦士が阻んだ。

そう。そんな彼らを守るのが、自分たち戦士の役目だから。

戦う彼らの前で、炎の巨人が少し小さくなった気がした。

そして同時に、何かが起こり始めた。

「なんだ？」

不意に変質した空気に、マイヤは一瞬戦いを忘れた。

嵐の、予感。

狩猟民族に生まれたマイヤは、空気の動きに敏感だ。例え闇夜であったとしても、嵐の気配は臭いで解る。

嵐が来る。しかも、ただの嵐ではない。

この気配。覚えがある。

どろりと、まわりついてくるような、風。次にはきつと、激しい雨が降り始める。

今は見えないが 空には、不気味な暗雲が立ちこめているのだろ  
う。

あの時のように。

マイヤの背筋に冷たい物が走った。

叩きつける、激しい雨。幾筋にもなって降り注ぐ落雷に照らし出され、あいつは居た。

もう、二十年近くも前のことだ。

今ではすっかり悪夢のように思える、現実。

まさか。

まさか、今になってそれはあるまい。

マイヤはシエイとイシルの戦いに、意識を戻す。

シエイは、自分の代わりに戦っている。マイヤにはそれを見届ける義務があった。

かつてイシルが去った時。マイヤは傷を負い、眠っていた。

その間に、イシルは去った。

シエイとイシルの間に、どんな約束があったのかは知らない。聞く気もなかった。

イシルとは生き方も死に方も違うということとは、最初から解っていたから。

(お前は、あいつを見習つな)

仇を撃たなくて良いのかと尋ねたシエイに、告げた言葉は本心だ。

(相棒は、ただの相棒だ。背中は預けていい。でも、命はくれてやるな)

(覚えておけ。命をくれてやっていいのは、女だけだ)

それに対する返事は確か、「そうなのかあ？」だったか。

当たり前だ。他のだれにくれてやれると言つのだ。守るべきは、自分の命と女との約束だけでいい。それが出来なければ……欲を出せば、こつなるのだ。

シエイを助けようとして、失った右足。

自分の命と、女との約束以外のものを守るつとした、自分の力以上のものを求めようとした報いだ。

もつとも、それを後悔したことは一度もない。

兄が、そうであつたように……。

はつと、マイヤは身体をこわばらせる。

今、自分は何を思った？

何が、若くしてこの世を去つた兄を思い出させた？ この 稲妻か？

マイヤが最初に思った通り、激しい雨が降り始めていた。

そして、天空を縦横無尽に走る、稲妻。

渦巻く暗雲の中心は やや東。村の方向。

すさまじい稲光が、走る。

天が裂けたかと思われた。

それは、イシルの剣に落ちた。

「熱い……」

剣を取り落とし、イシルが呻く。

と、その脳裏に一つの声が響いた。

どこかで聞いたことがある。しかも、「二度と聞きたくない」とその時も、そして今も思う声。

(熱くはあるまい)

(痛みも無い)

(死者は、痛みを感じぬゆえ)

ああ、そうだ。

前にもそう言われた。

だから、忘れようとしていたのか。二度と聞きたくないその言葉を。

(死してなお、人間に幻想を抱く者よ)

(自ら、それを滅ぼすまで、そなたは逝けぬ)

そうだ。

奴を、殺そうと思った。奴を殺すまで、生きたかった。

その思いすら、利用されたのか？

「お前は、殺す」

「魔道師。お前は俺が……」

「イシル？」

シエイが、マイヤが彼を見ている。その剣に身を委ねれば、全てが終わると、何故か解っていた。

だが。

「切るな、小僧」

全身が焼けただれ、声すらもまともに出せない。

それでも魔剣士は告げた。

「もう少しだけ、時間を……」

あいつを殺す時間を。

「誰のことを言っている？ イシル」

彼が答えるよりも早く。

不意に、イシルの身体より青い炎が燃え上がった。

それは、一瞬にして彼の全身を包み込む。

後に残った灰が、嵐の始まりを告げる風の中に舞った。

少し落ち着いたかなと、カル・ファンスは思う。信者はあらかた片づいた。炎の巨人 狂った精霊も、今ではかなり小さくなっている。

これなら、時間の問題だ。

やや離れた場所で、レイは最後の集中に入っていた。

手にした守護石が赤い光を放っている。狂った精霊はあの中に取り

込まれ、彼の力で癒される。

息をついた、その時だった。

何かが、魔道師の心をわしづかんだ。

とてつもない力の奔流を、彼の鋭敏な感覚が捕らえたのだ。

なんだ？ これは。狂った精霊などとは格が違う。かつては神にも

近い力を持っていたもの。司るものは 海。

「大海の、蛇王か？」

魔道師の呟きに、「是」と答える者が身のうちにいる。

「ミアナ！」

彼らを守ってくれている女戦士を振り返る。

「すぐに、君の村に向かう。案内してくれ」

「何があったの？」

カル・ファンスのただならぬ様子に、残った敵を切りながら駆け寄る、ミアナ。

「とんでもない者が、蘇ろうとしているんだ」

そして、同じように彼の側に駆け寄った　今まで、一番彼に近い

位置で彼を守っていた赤毛の傭兵に、

「テス・ライン。あなたはそのままレイを……」

そう言いかけたカル・ファンスの体が、沈んだ。

ミアナはその時の事を、こう記憶している。

崩れ落ちるカル・ファンスの身体の向こうに見えた、テス・ラインの剣。彼の血で赤く染まったその剣が、ゆっくりと弧を描いて再び鞘に収められたのを。

エピソード

「その話なら、知っているぜ」

先刻からしきりと女にからんでいた酔っ払いが、不意に口を挟んだ。

「俺も、てめえを探していたんだ。『裏切者』テス・ライン。カロスでは、五百セランの賞金首」

抜き身の短剣は、既に赤髪の男の首につきつけられている。

「ちよつとあんた、ここでのもめごとは」

「やかましい、ばばあ」

女将の抗議を血走った目で一蹴し、その傍らで眉をひそめている黒髪の女に向けて、歯をむき出して笑う。

「リヴ、やっぱりお前は俺にとっちゃ、幸運の天使だったわけだ！

まさかこんな所で賞金首に会えるとはな！」

がははと笑う酔っ払いの前で、風が舞った。

風の呪縛に捕らわれた男が、身動きもままならずにとつと倒れる。

「えらく、賑やかだな」

新たな客が『海豚亭』の看板をくぐったのは、その時だった。

旅人のマントの下から覗くのは、金茶の髪。顔だけをそちらに向けた酔っ払いの喉が、ぐつと鳴る。

「魔剣士……？」

一瞬、時間が凍てついた。

「魔剣士だと？　じゃあ、今の話の？」

「いや、俺も聞いたことがあるぞ。魔剣士イシルは、死んだ筈だ！」

「でも、生きていたんだろう？」

様々な、憶測が飛び交う中に、女の声が響き渡った。

「黙って」

はっと、そちらを振り返る一同に、黒髪の女は何事もなかったようにワインの杯を空けると、静かな声で告げた。

「遅かったわね、魔道師さん」

金茶の髪の男の更に後ろに立つ者に、声をかける。

「マナー違反だな、南の男」

焦げ茶の髪の魔道師が、笑う。

「店の中の抜刀は厳禁だ」

魔法は有効なのか？ という誰かの突っ込みを無視して、シルノアの魔道師ヴィルは鴨居をくぐった。

「彼はリヒト。レイスタの族長の使いだ。この話をしたら、是非話を聞きたいと言ったので連れてきた」

先に店に入った金茶の髪の男を、改めて紹介する。

「レイスタって、『暁の剣士』の？」

「ミアナの兄だ。久し振りだな、テス・ライン」

リヒトの言葉に、「役者が揃ったな」とテスが呟いた。

黒髪の女もまた、「そつね」と頷く。

「じゃあ続けてもらえるかしら？ 『裏切者』のテス・ライン」

《遠征路2 黄昏の騎影 了》